

考証 昭和天皇・マッカーサー元帥第一回会見

松 尾 尊 允

はじめに

敗戦直後の一九四五年九月二七日、昭和天皇が自らアメリカ大使館に連合国最高司令官マッカーサーを訪問し、約三七分間の会談を行ったことは、戦後史上著名な史実である。この会談の内容は、天皇の言によれば「マッカーサー司令官とはつきりこれはどこにもいわないと約束を交わしたことですから、男子の一言のごときことは、守らなければならない」との理由で、いまだに日米両国政府によって公表されていない。会談中ただ一人通訳として現場に立会った外務省参事官奥村勝蔵は、その日のうちに記録を作り、少くとも一部は外務省に、一部は宮内省に保管された。この記録が今日もなお正式には公表されていないのである。他方、マッカーサーの側でも、児島襄『天皇の敗戦責任』（文藝春秋社、一九八八年、五九ページ）によれば、「マッカーサー元帥は、天皇との対話はすべて極秘にすることを希望したので、書かれた記録はなにもない」（副官バンカー大佐の言）ということである。かかる重要会談の記録が作成されていないとは信じがたいが、今日までのところ、それに当たる文書はアメリカにおいても発見されていない。

しかし、「男の約束」にもかかわらず、会談内容は双方からもれた。一〇月一日、内務省スポークスマンは外人記者に対

し、会談内容の一部をわざと発表し、これが『ニューヨーク・タイムズ』やイギリスのBBC放送で報じられた。アメリカ側では、GHQ民間情報局の作成したNHK番組「真相箱」が、翌一九四六年五月五日に会談内容について放送し、『ライフ』同年三月四日号もライターバック記者の文章がこれとほぼ同じ内容をつたえた。

これらはあまり注目されず、いわば一過性の存在であった。ひろく一般国民に会見内容についてのあるイメージが定着するようになったのは、一九六一年に藤田尚徳『侍従長の回想』（講談社）が、一九六四年には『マッカーサー回想記』（津島一夫訳、朝日新聞社）が公刊されてからのことである。天皇が戦争の全責任を負うことを明言し、自分の一身はどうなってもよいから国民を救ってほしい、とのべたという「戦後美談」が流布しはじめ、昭和天皇の没後にいたっても、なおこれが一般に信じられているのである。

この傾向に一石を投じたのは児島襄「天皇とアメリカと太平洋戦争」（『文藝春秋』一九七五年二月号。のち前記の単行本『天皇の敗戦責任』となる）であった。その中ではじめて示された。奥村勝蔵「謹記」の「マッカーサー元帥」トノ御会見録」（『御会見録』と略す）は、一大スクープであったにもかかわらず、不思議にも、当時マスコミの世界ではまったくといってよいほど注目されなかったが、研究者には大きな衝撃を与えた。その中には前記のような天皇のことばは存在しないのである。「戦後美談」の流布するなかで、これに対する疑惑がはじめて生まれたのであるが、近くは豊下櫛彦「天皇とマッカーサー会見」の検証」（『朝日新聞』一九八九年二月六日・七日付夕刊）が、前記一九四五年一月一日の日本政府内務省スポークスマンの談話を紹介した同年一〇月三日付の『ニューヨーク・タイムズ』記事をとりあげ、そこに書かれている会見内容が、奥村の「御会見録」とも異なることを明らかにした。今日では天皇・マッカーサー会談の内容がますます注目を浴びて来ているといっている。ところで、これまでのこの会見についての所論に共通する問題点として、史料批判が充分には行われていないことを指摘せねばならない。つたえられる会見内容が、いったい何時、誰によって、何を材料として、どういう目的で発表、あるいは

記録されたのか。それによってどの信憑性の差が生ずるのか、といった吟味がほとんどなされていない。史料に対する価値判断を行わないまま、新奇の事実らしきものを追求める傾向が看取されるのである。

唯一ともいふべき例外として、最近公表された豊下櫛彦「天皇は何を語ったか―「天皇・マッカーサー会見」の歴史的位置(上)―」『世界』一九九〇年二月号、同「空白」の戦後史―「天皇・マッカーサー会見」の歴史的 position(下)―」(同上、三月号)―以下豊下論文と略す―は、天皇発言の漏洩の過程および漏洩者の意図についての綿密な考察に加えて、会見の歴史的背景についての鋭利な分析により、この会見の歴史的意義に新しい光を当てようとしている。

この小論では、豊下氏の資料に関する全面的援助のもとに、今日入手できる限りの会見内容を報じる資料を逐一検討し、会見内容の真実に接近する作業を試みる。なお豊下氏のほか資料収集に厚意を示されたO・ケーリ、高橋紘、田中真人、夫馬進、鷺尾賢也の諸氏に謝意を表する。

一 会見の実現まで

天皇とマッカーサー元帥(以下マ元帥と略す)との会見が、日本政府側とGHQ側との間で合意に達したのは、マ元帥が日本に到着した八月三〇日から二週間後、宮城の真向かいの第一相互ビルにGHQが置かれてから三日目の九月二〇日のことである。この日の午前一時、二日前に重光葵に代って外相に就任した吉田茂は、GHQにマ元帥をたずねて天皇の挨拶を伝えるとともに、何かいいたそうに「モジモジ」しているマ元帥に、「本大臣ノ参考トシテ承知シタキハ貴元帥ニ於テ陛下ノ御訪問ヲ期待セラルル次第ナリヤ」と問うた。これにつづいて次のような問答が続いた。

マ元帥 「陛下ニ御目ニカカルコトハ自分ノ最モ喜ハシキコトナルカ自分ハ陛下ヲ「インバラス」又「ヒューミリエート」スルコトヲ願ハス」

吉田 「陛下ニ於カレテモ来訪スルコトハ貴元帥ヲ「インバラス」スルコトナキヤトノ思召モアリ」

マ元帥 「陛下ヲ「インバラス」スルコトハ最も希望セサル所」

吉田 「若シ陛下ノ御来訪アルトシテ其ノ場合日時其他ニ付希望アリヤ」

マ元帥 「一ニ陛下ノ御都合ニヨルヘシ場所ハ司令部ヨリ米国大使館ノ方可ナラスヤ」

右は一九七六年七月に公開された外務省文書「吉田外務大臣・「マッカーサー元帥」会談録」（江藤淳編『占領史録』Ⅰ、講談社、一九八一年、二九〇ページ以下）の一節である。これによる限り、マッカーサーは天皇の来訪を一応は辞退してみせながらも、結局は受ける意を示し、しかも場所をGHQ本部でなく、マッカーサーの公邸たる米国大使館に指定したのである。

マ元帥はもともグルー元駐日大使らと同じく「共和党穩健派」に属し、「中国派」に対抗して対日宥和策を主張する「日本派」の一員であつた（森田英之「アメリカにおける政府と民衆の天皇観の相克について」『歴史学研究』五四七号、一九八五年）。彼は日本占領前から、秩序ある政府を維持するには天皇が必要であるとの認識を抱いていたが（袖井林二郎『占領した者された者』サイマル出版会、一九八六年、三五ページ）、呆気ないほど速やかに遂行された日本軍降伏の実状を見るに及んで、ますますその確信を強めた。早くも九月一七日には、五〇万は必要だとされていた占領軍を向う半年間で二〇万人にまで削減すると、本国政府との協議ぬきで記者団に発表した。

しかしマ元帥といえども、天皇制をそのまま維持できるはずはなかった。アメリカ国内の反天皇世論の勢いは戦後もおとろえることなく、九月一七日のマッカーサー声明はたちまちその翌日には天皇を戦争裁判にかけるべしとの上院決議で報いられた。マ元帥としてはアメリカ世論をなだめるためにも、天皇の「服属儀礼」（坂本孝治郎『象徴天皇制へのパフォーマンス』山川出版社、一九八九年、七三ページ）を行い、マッカーサーこそが日本における最高権力者であることを内外に示すことが必要であつた。しかしマ元帥は天皇にこれを強制することを避けた。『マッカーサー回想記』（下、一四一ページ）はいう。

私が東京に着いて間もないころ、私の幕僚たちは、権力を示すため、天皇を総司令部に招き寄せてはどうかと、私に強くすすめた。私はそういった申出をしりぞけた。「そんなことをすれば、日本の国民感情をふみにじり、天皇を国民の目に殉教者に仕立てあげることになる。いや、私は待とう。そのうちには、天皇が自発的に私に会いに来るだろう。いまの場合は、西洋のせっかちよりは、東洋のしんぼう強さの方が、われわれの目的にいちばんかなっている」というのが私の説明だった。

『マッカーサー回想記』の信憑性についてはかねてから疑問が提出されているが、⁽²⁾この場合は事実を物語っているといつてよいであろう。ただし、このことは、GHQから天皇来訪について、まったく示唆もなかったことを意味しない。児島襄『日本占領』第一巻（文藝春秋社、一九七八年、二二七ページ）によれば、九月三日、重光外相に同行した外務省調査局長岡崎勝男に對し、GHQ側は「天皇がマッカーサー元帥を個人的に訪問すれば元帥は喜ぶ」との趣旨の発言を行った。これに類することは他にもあった可能性が⁽³⁾ある。

一方、戦犯指名、あるいは退位などの処遇をおそれ、不安の日々を送っていた天皇あるいは日本政府の側でも、天皇のマ元帥訪問は当然考慮されていた。しかし、藤田尚徳『侍従長の回想』（中公文庫、一六九ページ）がいうように「陛下が連合国軍最高司令官として日本の『統治者』であるマ元帥に、いかなる態度をおとりになるかによって、天皇制の問題に現実的な解釈を与えることになる」だけに、「慎重に事を運ぶ必要があった」。

天皇は、ミズリー号艦上の降伏の席に連なった外務省情報局第三部長の加瀬俊一から、マッカーサーの「自由と正義と寛容」を強調した演説の報告を聞いて感銘を受け、「責任を認めることによってむしろ罪は許されるに違いない、という期待感」を抱き（袖井『マッカーサーの二千年』九三ページ）、マッカーサーとの会見をのぞんだが、『重臣』の中には反対するものが相当あった」という。（住本利男『占領秘録』毎日新聞社、一九六五年、一三二ページ）。

中でももっとも強く異を唱えたのは、東久邇宮内閣の最初の外相重光葵であった。マッカーサーとの直接交渉で軍政を回

避しえて自信を強めた重光は、「皇室擁護は記者（重光のこと——松尾）の折衝を先頭とし、東条等の審問に依つて可能なり、即過去の指導者は全部積極、消極の意義に於て多少の責任を負担し、皇室及国民の責任なきを立証せんと決意」していた。「若し過去の指導者にして単に責を他に嫁し、自ら責を免れんことに汲々たるに於ては、国内は分裂し、感情は激化するに至るべく、若し夫れ、陛下御自身真珠湾攻撃に責なきことを公然言明せらるるに至らば、国体の擁護は国内より崩壊をみるに至らんことを恐るるに至れり。蓋し軍部の玉碎派は降伏、終戦に対し、今日尚陛下の御聖断に対し内心平ならざるもの多きものあればなり」——これが重光の判断であつた（伊藤隆・渡邊行男編『続重光葵手記』中央公論社、一九八八年、二五九ページ）。

したがって重光は、東久邇宮首相・近衛副総理の外人記者との会見やマ元帥訪問を、さらには天皇の記者会見とマ元帥訪問をも「媚態」として排し、九月一七日には、閣内より戦争責任者を一掃し、部局長級の少壯者を登用する内閣大改造論を主張する。ところが重光は、終戦連絡事務局所管問題もからんで逆に閣内で孤立し、単独辞職のやむなきにいたつた。

天皇のマ元帥訪問をも「媚態」とみなす重光の辞職により、訪問は一挙に実現することになった。前記のように二〇日には吉田外相の打診があり、同じ日、吉田と入れかわりに侍従長藤田尚徳がマ元帥を表敬訪問した。この日早朝、吉田の訪問に先立って、外務省には「朝来司令部側ニ於テハ、侍従長来訪ノ砌陛下自ラ御来訪ノコトヲ申出サレタル場合ニ付長ク協議セルカ如シ」の情報が入っていた（前出『占領史録』I）。このことはこの日の朝までには天皇来訪の意がGHQに伝わっていた可能性のあることを物語る^①。これを承知の上で、吉田は天皇訪問の件を切出し、またマ元帥の方でも協議をふまえて前記の意思表示を行ったのである。

ところで、藤田侍従長のマ元帥訪問の意図は何であつたのか。単に天皇訪問打合せだけのことなら外相だけで充分のはずだから、侍従長の訪問は天皇の主体的意思を直接マ元帥につたえるためのものであつたと推測される。藤田の『侍従長の回想』によれば会見の内容は「政治の話でなく、主として健康とか天候の挨拶であつた」（二七一ページ）というが、にわかに信

じがたい。「御会見録」には、明確に、天皇がポツダム宣言を忠実に実行する旨を藤田に伝えさせたことが記されている。岸田英夫『侍従長の昭和史』（朝日新聞社、一九八二年、一六〇ページ）には、右の事実をのべ、さらにマ元帥が「それは、占領以来、日本政府がとってきた態度に、事実において証明されている」と答えた由を紹介している。さらに前記児島『日本占領』Iは藤田の訪問は「天皇の使者としての表敬と、しきりに要求される米国人記者の天皇取材申込みについて総司令部の意向をたずねるためであった」と記している。児島は典據を明らかにしていないが、いかにもありそうな話である。いずれにせよ、藤田の訪問は、単なる表敬訪問でなかったことは確実である。

二 天皇の外人記者との会見とマ元帥訪問との関係

ここで検討の要があるのは右の天皇への外人記者取材と、天皇のマ元帥訪問との関係である。近衛文麿の秘書細川護貞の『細川日記』九月十二日の条には「各方面の意見の中、マックアーサー司令部と交渉ある者からの風説は、陛下御躬ら米大統領若しくは米国民に、メッセージを御出し遊ばしては如何との説あり。今日、公は木戸内府と会見、内府は乗気なる由」とある。記者会見の発想がGHQから出ていることが推測される。すでに近衛は『ニューヨーク・タイムズ』記者 Frank L. Kluckhohn と九月一日に会っていたが、そのクラックホーンから九月一四日には「陛下より米国民に対し、ニューヨークタイムズ誌を通じて、メッセージを送られては如何」の提案があった。クラックホーンは近衛の側近牛場友彦と細川護貞に対し、メッセージだけでなく拜謁したいこと、「単に拜謁するのみにて満足すべく、夫れは何か米国民が、個人的（パーソナル）なる印象を植えつける上に、必要なるべし。現にアトロシテイの問題やかましき時なれば、効果は絶大なるべし」——つまり、天皇に会うだけで天皇にとって有利なアメリカ世論を形成できること、会っている質問するつもりは

ないこと、GHQの干渉「については心配なきこと」、「メッセージは大要四点を主眼とすれば、米国民の感情に最も適切に合致すべきことを説明」した『細川日記』九月一四日の案。これを聞いた近衛は直ちに重光外相を訪問。重光は不賛成であったが『重光葵手記』五五三ページ、結局加瀬俊一が内大臣秘書課長松平康昌と相談してメッセージの案文を作成することになった。クラックホーンの提案は、GHQの意向を受けてのものである。だからこそGHQについては心配がないと説明しているのである。注目すべきはメッセージの主眼四点を提案していることである。後記のように、クラックホーンの質問に対する天皇の回答というかたちで出されたメッセージは四点にわかれている。これは偶然であろうか。私はこの九月一四日の段階でクラックホーンの四カ条の質問と、それに対する天皇の回答の原型がクラックフオーンによって示されたものと考え。なぜならば、九月一四日に近衛は重光に「真珠湾攻撃は東条の独断であつて、陛下は知らなかった」という趣旨を天皇が記者に言明する案を出しているからである（同上）。これはクラックホーンの主眼四点の中に当然含まれており、かつ、現実の四カ条回答の一つとなっている。さらに臆測を逞しくすれば、それらは実はGHQが準備したものではなかったか。三カ月後の、一九四六年元旦に発せられた、いわゆる天皇の人間宣言の原案も、実はGHQの手で作成されていることを思えば（拙稿「象徴天皇制の成立についての覚書」『思想』一九九〇年四月号）、あながち見当ちがいの臆測とはいえない。GHQの意を受け、しかも天皇に直接質問はしないという天皇側にとって有利な会見提案だけに、日本側もこれを受けることにしたのである。

拜謁は月曜日（一七日）となろうと細川は記しているが、実現しなかった。九月十九日付の日記には、宮相石渡莊太郎の言として、拜謁がおくれているのは「外務省が何とか彼とか云ひて遅れて居るからにて、陛下はむしろ早きを御希望なり」とある。おそらく重光外相の反対によるものであろう。

結局記者会見の件も、マ元帥との会見同様重光外相辞職後に決定した。九月一九日にはUP通信社長 Hugh Baillie の天皇拜謁の申入れがあり、『細川日記』九月二三日の条に、クラックホーンは九月二五日午前に、ベアリーはその日の午後

拜謁することに決定と記されている。おそらくこれと同時に二七日の天皇マ元帥訪問も決定したと思われる。

高橋紘氏は、この外人記者会見と、マ元帥訪問の記事が、九月二九日付の日本の新聞に同時に掲載されたことに着目し、「誰かが会見内容とマ元帥訪問の記事（実は写真——松尾）を、同一紙面に載せる工夫をしたのではないか。元帥との会見内容を秘密にするかわりに、マスコミを使って天皇の第一声を内外に流したのではなかったのか」と論じている（『陛下、お尋ね申し上げます』三九二ページ）。この鋭い着想を一步進めれば、「誰か」とはGHQであり、記者会見から二日後にマ元帥訪問の日程をきめたのもGHQということになる。天皇マ元帥会見写真と記者会見記事をのせた九月二九日の朝日・毎日・読売報知三紙を内務省が発禁処分したことに對し、GHQが直ちにこれを取消させたことは、この推定を裏付ける。⁽⁶⁾ GHQには前記の新聞利用の見地のほか、外人記者会見、とくにクラックホーンとの会見（文書による回答をふくめて）を、マ元帥との会見の予行演習にあてたいという、天皇への配慮が働いていた。⁽⁷⁾ これを証明するために、両記者の質問に対する天皇の文書回答を検討しよう。両記者との会見は、前記クラックホーンの提案どおり、単なる拜謁におわり、記者側からの口頭の質問は一切行われなかった。

両記者に手交された英文回答の実物は今日まだ公表されていない。筆者の見ることのできるのは、九月二五日付の『ニューヨーク・タイムズ』にのったクラックホーンの送稿、およびこれが日本に逆に送られて九月二九日付の『朝日新聞』にのったクラックホーンの記事と、同日付の『毎日新聞』にのったベリーの手記である。いま朝日、毎日両紙の記事を『ニューヨーク・タイムズ』と照合しながら一問一答式にまとめて大要を示せば次のとおり。

まずクラックホーン。

(1) 問 社会・教育制度改革の必要性と日本の将来についての所見如何。

答 「英国のやうな立憲君主国がよい。」「国民の総意」に従った改革必要。当面食料と住居の確保が急務。やがて国際社会に「正当な地歩」を再び占め

ること」を希望。

- (2) 問 「東条大将は真珠湾に対する攻撃、ルーズベルト米大統領の言葉をかりるならば『欺し討ち』を行ふために、宣戦の大詔を使用し、その結果米国の参戦を見たのであるが、大詔をかくのごとく使用することが、陛下の御意図であつたでせうか」。

答 「『宣戦の大詔は東条のごとくにこれを使用することは、その意図ではなかつた』といふ意味の簡単な御返事があつた」。

- (3) 問 日本は国際社会に復帰し、再び戦争を起こさないための必要な手段をとりうるか。

答 然り。「米軍の日本本土占領を傷つける重大な不祥事の起らなかったことに満足」。

- (4) 問 原爆が将来の戦争をなくするのでは。

答 武器によっては永久平和実現せず。勝者敗者を問わず「自由なる人民の協力一致によつてのみ達成される」。

ついでベールー。

- (5) 問 日本の将来についての意見。

答 「国際社会の一員となる資格のあることを立証」せん。問題は約束より実行。

- (6) 問 日本における民主主義の将来。

答 革命的变化は望まず。「いづれ出現すべき政府の民主主義的形体は必ずしも米国或は英国のそれと全く揆を一にするものとは限らないであらう」。

- (7) 問 教育の方向。

答 「真理の探究、創造性、広大なる気宇及び正確なる世界的識見」の育成へ。

- (8) 問 日本国民の生活にとって緊急の要は。

答 主要食料品と衣服・住居・燃料の欠乏で冬が越せないおそれあり。

- (9) 問 自由な報道交換の要は。

答 然り。国際平和の保証として。

これを後述の「御会見録」と照合すると、右の(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(8)の各論点は会談にも出て来ることがわかる。とくにクラックホーンのそれがすべて「御会見録」に現われることは両会見の関係の密接さを示すものである。

こう書けば記者会見からマ元帥訪問へと、いかにもスムーズに、GHQの指示にしたがって事柄が進行したようにみえるが、実はわずかな点ではあるが日米間に重要な食い違いがあった。それはクラックホーンの第二番目の質問に対する回答をめぐる生じた。回答は前記のように加瀬俊一がはじめの原案を作ったと推定されるが、結局は「人間宣言」同様に幣原喜重郎が英文をまとめ上げた。『木戸幸一関係文書』（東京大学出版会、一九六六年）所収の「幣原男爵原案」には「昭和二〇年九月二五日付で外務大臣秘書官より内大臣宛送付されたもの」との編者注がついていることからすれば、この原案は会見当日もしくは前日になって完成したものとみられる。おそらく完成に先立って天皇もその側近も、さらには政府首脳もこれに目を通したと考えられる。これを毎日紙上に発表された記録と照合すると、対ベリーの場合は、すべて原案のとおりである。これはベリーに手交された正文が幣原原案と同一だったことを意味する。ところが対クラックホーンの場合は第二項目の部分で(1)原案(2)正文（後述のように、この第二項目だけが判明する。）(3)『ニューヨーク・タイムズ』記事(4)前出の『朝日新聞』記事がすべて一致しない。とくに(1)(2)と(3)(4)の間には大きな溝がある。

正確を期するために英文資料を原文のまま引用しよう。

(1) Whether he intended that the war rescript should be used as General Tojo used it.

Answer: As to the strategic details of war, the precise time and manner for the disposition of military and naval forces should be left to the decision of the commander-in-chief of these forces to be taken with an eye to the actual development of the situation on the spot.

（宣戦の詔書を東条将軍が使用したように使用するおつもりだったのでしょか。

答、戦争における個々の策戦上の細部についていえば、陸・海軍部隊の配備の正確な時間や方法は、現場の状況の進展に合わせて陸・海軍の最高司令官の判断にまかされる。

(2) "Was it His Majesty's intention that the war rescript should be used as General Tojo used it?"

The spokesman said the Emperor's answer was:

"As to strategic details of the war, such as disposition of military and naval forces and the time, place and manner of the attack, the Emperor was not generally consulted, these being decided almost exclusively by the High Command. At any rate it was His Majesty's intention to issue a formal declaration of war before the commencement of hostilities."

(問は(1)と同じ。答。陸・海軍の配備、攻撃の時間や場所など戦争の個々の作戦については、天皇はほとんど相談を受けない。それらは最高司令官だけが、ほとんどの場合、決定する。ともかく、陛下は、戦争開始の前に、正式の宣戦布告をなさるつもりであった。)

(3) Asked whether he had intended that the war rescript should be used as General Tojo had used it to launch the attack on Pearl Harbor which brought the United States into the war. The answer was brief. The Emperor said in effect that he had no intention of having the war rescript used as General Tojo had used it.

(東条大將は真珠湾に対する攻撃を行うために宣戦の詔書を使用し、その結果アメリカの参戦をみたのであるが、このように詔書を使用することが、陛下の御意図だったのでしうか、との質問に対し、天皇は手短かに大要次のように答えた。「私は宣戦の詔書を東条大將が使ったようには使わせるつもりはなかった」。

(1)と(2)の間には基本的な差はない。(1)の意味内容をさらに正確にするための手直しである。おそらく吉田外相の差金であろう。『ニューヨーク・タイムズ』記事は「天皇の回答は吉田によって承認されたものだ、私は聞かされた」と結ばれている。(3)と(4)との問も基本的な差はないが、どうして『朝日新聞』の記事には、「ルーズヴェルト大統領の言葉をかりる

ならば『欺し討ち』を行ふために」という余分な文句が加わったのだろうか。おそらくニューヨークからの発信人がこれに加えたものと思われる。

問題は(2)と(3)のギャップである。タイムズ紙記事をしていねいに読めば(3)が要約であることがわかる。朝日紙も「といふ意味の簡単な御返事があった」と正確に訳している。たしかに、「東条が使ったように宣戦の詔書を使うつもりがあったのか」という質問に否とこたえることは、結果としてはクラックホーンの要約となっても仕方がないが、大胆にすぎる要約である。回答の正文は決して簡単でなく、かつ注意ぶかく東条に言及することを避けている。しかもクラックホーンは他の質問に対する回答では、ほとんど原案に正文を引用しているのである。

このほか今一つ重要な差がある。(4)で「英国のような立憲君主国がよい」とある部分は(3)にはもちろん存在するが、(1)には存在しない。肝心の正文が入手できぬ(第二項目だけが『ニューヨーク・タイムズ』九月二十九日付第四面「マッカーサー、日本の検閲を廃止する」の記事の中に日本内務省スポークスマン談として掲げられている)ので確実なことはいえぬが、おそらく正文にもこの部分は無かったと考える。なぜならば対ベロー回答では「いずれ出現すべき政府の民主主義形体は必ずしも米国或は英国のそれと全く揆を一にするものとは限らないであらう」といつているからである。(逆に(1)の第三項目の最後にあった「私は賢明にして政治的手腕のある連合国最高司令官を信頼している。付言すれば、長期にわたる有力な平和世論が存在しなければ戦争は急にはなくならないで、むしろ内乱をひきおこすことになる」の文章は(4)で欠落している)

タイムズ紙はクラックホーン記事を一面のトップに掲げ、「ヒロヒト、だまし討ちを東条のせいにする」の大見出しを付し、さらに「天皇平和を希求」「食糧問題がカギ」と並んで「彼は英国のごとき立憲君主制を望む」のサブ・タイトルをつけている。前記の二つの改変部分が重要な意味をもっていることがわかる。この重要な改変がはたしてクラックホーンの一存で可能だろうか。既述のように彼の拜謁申入れの当初からGHQの意向が働いていたことを考えると、アメリカ世論緩和

のため、GHQがあえてこの改変をクラックホーンに指示したのではなからうか。この改変は日本側と打合わせた上のものでなかったため、これが朝日紙上に出現すると、日本政府がびっくりして発禁を命じたのであろう。

三 会見当日の概況

天皇のマ元帥訪問についての協議は、GHQ側と前記萩原徹との間に、九月二〇日以降行われた。九月二五日には萩原・奥村勝蔵・加藤進⁽⁸⁾（宮内省総務局長）・寛素彦⁽⁹⁾の四人が集まり、萩原の報告を聞き、当日の方針をきめた。寛の著書『今上陛下と母宮貞明皇后』（日本教文社、一九八七年、七六ページ以下）によれば、「事前極秘、したがって途中の警衛なし、供奉員は最小限度とし」アメリカ大使館までの道筋は、二五日以降内容極秘のまま交通巡査によって交通整理をさせておくこと、等である。なお当時の寛の手帳には大要次のようなメモが残っているという。

一 行幸は全く非公式。(quite informal)。二 総司令官の格式。三 会話の内容はマッカーサーよりは全く政治的話題に触れざること。四 陛下よりの御質問は何でも可。五 時間の長短は一に陛下の思召しにかかる。六 夫人は出ないと想像される。七 車は三並び逆付、玄関にはフェラーズ (Fellers) という官房長と、パワーズ少佐 (Major Powers) という日本語を話す者の二人が出る。フェラーズは自ら名乗り、御案内をして中に入る。大臣、侍従長、御通訳は中につづき、他の随員は、ホールかその横のクロックで待つ。クロックの次の次の室で御会見が行なわれる。そこへは元帥が御案内する。

ただし、三は全くそうはならなかった。五は日本側では三〇分以内と予定していた（同上、八八ページ）。

翌九月二六日、寛は当日の運転手四名を伴って米大使館を外部から観察した上、図面によって進入路や駐車について説明したあと、午後再び萩原・奥村と協議し、行幸計画を最終的に決定した。その中で注目すべきことは供奉車二台のほか別に先駆として一台をつけ、これに皇宮警察、警視庁、禁衛府衛士監（旧近衛供奉将校）より各一名をのせ、大使館門外に駐車させ、

ひそかに護衛の任に当たらせようとしたことであつた。⁽¹⁰⁾

九月二七日の天皇の皇居出発から帰着までの大要を笈の著書をもとに記しておこう。

午前九時五十分。天皇一行は吹上御文庫の御車寄前を出発した。天皇の顔は「心なしか非常にきびしい」ようにみえた。皇后はじめ側近一同も見送った。中にはこのまま天皇が帰れないのではないかと案じた人たちもいた。菊花の紋章入りの黒ベンツに天皇と侍従長が、あとの黒パックード二台に宮内大臣石渡莊太郎、侍従徳大寺実厚、侍医村山浩一、通訳奥村勝蔵、行幸主務官笈素彦が分乗した。⁽¹¹⁾九時五二分正門を出て、予定どおり、祝田町交差点——桜田門前——虎ノ門交差点——溜池三會堂前——米大使館正門前——靈南坂の経路で、現在のホテル・オークラ別館入口前の大使館門を通つて玄関に到着した。⁽¹²⁾ときに十時一分であつた。途中桜田門前で赤信号のため停車を余儀なくされたが、誰も天皇一行と気がついた様子はなかつた。

玄関には打合せどおり、フェラーズ准將とバワーズ大尉が出迎した。廊下の途中でマ元帥が迎え握手した。天皇は「必要以上に低く頭をお下げに」なり、元帥は「若干そり返り気味で」、天皇の姿に「いかにもみじめに拝された」。⁽¹³⁾元帥が案内して、奥村通訳だけをともなつて、天皇は客間に入り、会談に入った。奥村の手記「通訳」(『国際時評』一九七三年六月号)によりその状況を示そう。

客間の中は、まるで空き家のように、ガランとして居た。飾りは何一つ無い。あとで判ったことだが、この部屋の絵とか飾りは、全部開戦当時の大使館の私用品とかで、彼は引き揚げのとき、それらの品物をすっかり片付けたらしい。

写真がすむと、マッカーサーは陛下にファイヤー・プレイスに向かつて左側のソファアをすすめ、自分は右側のソファアに腰を下した。私はその間の一寸さがった椅子に座る。ファイアー・プレイスには、季節にはまだ早い火が赤々と燃えていた。⁽¹⁵⁾

マッカーサーの顔を間近に見ると、歴戦の疲れが深いしわになっている。日焼けした顔面には全く血の気が無くて、皮膚というよりも皮革という感じであ

る。

彼は非常に緊張して居た。最初の挨拶がすむと彼は私をきつとにらみ、「Tell the Emperor」と強い声で切り出したあと、滔々としやべり始めた。おそろく前の晩から想を練っていたのであろう。

実をいうと、私は、この御会談には、びくびくしながらお伴をした。というのは、私はイギリスで英語を覚えたので、イギリス人の言うことはまあまあ判るが、アメリカ言葉は全くにが手である。もし、マッカーサーの言うことが判らなければどうしようかと、おっかなびっくりだった。

しかし、彼の英語は、いわば漢文口調で、立派だった。一語一語がはっきりして居た。あまり一時に長くしゃべられると、私は通訳しきれなくなるから、適當のくさり^(マッ)でマッカーサーに話を止めてもらい、それを陛下に申し上げた。当時、宮内省の式部官から、外国人の言うことをお上に申し上げるときは、終わりに「……と申して居ります」と言うように、と言い聞かされていたので、私はこのときも通訳の終わりに「……と申して居ります」と付け加えた。すると、陛下はソファ^アからお体を乗り出すようにして、これに応酬されようとするが、間髪を容れずマッカーサーが私に“Tell the Emperor”と言って、また滔々とやり出す。こういうことが何度か繰り返されたが、このマッカーサーの「演説」みたいなものが終わったとき、やっと、陛下は御考えを御話になり、いわば「会談」が始まったのである。

この御会談の内容については、私は語る自由を持たない。元来私は、役人が現役中に、自分の職務上知った公のことについて、自由に書いたり話したりすることは、あまりいいことではないと思っている。それに、私はこの御会談のあと、すぐその記録を作り、それは外務省に残っている。真実が失われる心配は無い。⁽¹⁶⁾

一方随行者たちの状況をさらに算本によって記せば、彼らは客間の隣の書齋で待たされ、フェラーズとバワーズを相手に雑談を交していた。予定の三〇分が過ぎて「内心いささか心配になって来た頃」ドアのない隣室から天皇と元帥が姿を現わした。驚いたことに「先刻までは傲然とふん反りかえっているように見えた元帥が、まるで侍従長のような、鞠躬如として、とでも申したいように敬虔な態度で、陛下のやや斜めうしろと覺しき位置で現われたのである」。天皇は自ら供奉員を一人

一人元帥に紹介したが、藤田侍従長には紹介のことばの前に“Admiral Fujita! How do you do?”と声をかけ親しげに握手したので、「一座の空気も一段と和やかになった」。元帥は天皇を抱きかかえんばかりの態度で玄関まで見送り、ドアの外で「長身を屈め、いんぎんな態度で握手をするや否や、はっと我に返ったように急いで扉の中に消えた。これは事前打ち合わせにはなかったことであった。お帰りの車中、陛下はいつになく朗らかに、いろいろお言葉多くお話になったと後刻侍従長から承った」⁽¹⁷⁾。

四 会談の内容 その一

極秘とされた会談の内容は、既述のようにすでに洩れている。これをつたえる諸資料⁽¹⁸⁾のうち、有意のものについて検討を加える。その際、出所が日本側すなわち天皇自身もしくは通訳にあたった奥村勝蔵と判明するものと、アメリカ側すなわちマッカーサーを出所とするものと二つに分類する。まず日本側から始めよう。

1 奥村勝蔵謹記「マッカーサー元帥」トノ御会見録」

「マッカーサー」元帥トノ御会見録

昭和二十年九月二十七日 午前十時 於在京米大使館

石渡宮相 藤田侍従長 徳大寺侍従 村山侍医 寛行幸主務官扈從

定刻米大使館ニ御到着、玄関ヨリ「フェラーズ」准将ノ御先導ニテ館内ニ入ラセラレ、居室入口ニテ「マ」元帥御出迎申上ゲ。
陛下ヨリ御握手ヲ賜レバ、

マ元帥 本日ハ行幸ヲ賜リ光栄ニ存ジマス。

(1) 陛下 オ目ニカカリ大變嬉シク思ヒマス。

元帥ノ案内ニテ居室中央ニ立御。元帥其ノ向ツテ左側ニ立テバ、米國軍写真師ハ写真三葉ヲ謹写ス。

更ニ元帥ノ案内ニテ「ファイア・ブレイス」ニ向ツテ左ノ椅子ニ陛下御着御アリ、元帥ハ右側ノ同様ナル椅子ニ着席ス。

元帥ハ極メテ自由ナル態度ニテ

マ元帥 實際写真屋ト云フノハ妙ナモノデ、パチパチ撮リマスガ、一枚カ二枚シカ出テ来マセン。

陛下 永イ間熱帯ノ戦線ニ居ラレ御健康ハ如何デスカ。

マ元帥 御陰ヲ以テ極メテ壮健デ居リマス。私ノ熱帯生活ハモウ連続十年ニ及ビマス。

之ヨリ元帥ハ口調ヲ變ヘ、相当力強キ語調ヲ以テ約二十分ニワタリ滔々ト陳述シタルガ、ソノ要旨左ノ如シ。

(2) マ元帥 戦争手段ノ進歩、殊ニ強大ナル空軍力及ビ原子爆弾ノ破壊力ハ筆紙ニ尽シ難イモノガアル。今後モシ戦争ガ起ルトスレバ、ソノ際ハ勝者、敗者ノ論ナク等シク破壊シ尽シテ人類ノ絶滅ニ至ルデアラウ。現在ノ世界ニハ今猶憎惡ト復讐ノ混迷ガ渦ヲ巻イテ居ルガ、世界ノ達見ノ士ハ宜シクコノ混乱ヲ通ジテ遠キ将来ヲ達觀シ、平和ノ政策ヲ以テ世界ヲ指導スル必要ガアル。

日本再建ノ途ハ困難ト苦痛ニ充チテ居ルコトト思フガ、ソレハ若シ日本ガ戦争ヲ継続スルコトニヨツテ蒙ルベキ惨害ニ較ブレバ、何デモナイコトデアラウ。モシ日本ガ更ニ抗戦ヲ続ケテ居タナラバ、日本全土ハ文字通りニ殲滅サレ何百万トモ知レヌ人民ガ犠牲ニナツタデアラウ。

自分ハ自ラ日本ヲ相手ニ戦ツテ居ツタノデアルカラ、日本ノ陸海軍ガ如何ニ絶望的状态ニアツタカヲ十分知悉シテ居ル。終戦ニ當ツテノ陛下ノ御決意ハ、国土ト人民ヲシテ測リ知レザル痛苦ヲ免レシメラレタ点ニ於テ、誠ニ御英断デアル。

世界ノ世論ノ問題デアルガ、將兵ハイツタン終戦トナレバ普通ノ善イ人間ニナリ終ルノデアル。然シ其ノ背後ニハ戦争ニ行ツタコトモナイ幾百万ノ人民ガキテ、憎惡ヤ復讐ノ感情デ動イテ居ル。斯クシテ所謂世論ガ簇出スルノデアルガ、ソノ尖端ヲ行クモノガ「プレス」デアル。米國ノ世論、英

国ノ世論、支那ノ世論等々色々出て来ルガ、「プレス」ノ自由ハ今や世界ノ趨勢ニナツテ居ルノデ、ソノ取扱ヒハ中々困難デアル。

- (3) 陛下 コノ戦争ニツイテハ、自分トシテハ極力之ヲ避ケ度イ考デアリマシタガ、戦争トナルノ結果ヲ見マシタコトハ、自分ノ最モ遺憾トスル所デアリマス。

マ元帥 陛下ガ平和ノ方向ニ持つテ行クタメ御軫念アラセラレタ御胸中ハ、自分ノ十分諒察申上グル所デアリマス。只、一般ノ空氣ガ滔々トシテ或方向ニ向ヒツツアルトキ、別ノ方向ニ向ツテ之ヲ導クコトハ、一人ノ力ヲ以テハ為シ難イコトデアリマス。恐ラク最後ノ判断ハ、陛下モ自分モ世ヲ去ツタ後、後世ノ歴史家及世論ニヨツテ下サルルヲ俟ツ他ナイデアリマセウ。

- (4) 陛下 私モ日本国民モ敗戦ノ現実ヲ十分認識シテ居ルコトハ申ス迄モアリマセン。今後ハ平和ノ基礎ノ上ニ新日本ヲ建設スル為、私トシテモ出来ル限り、力ヲ尽シタイト思ヒマス。

マ元帥 ソレハ崇高ナ御心持デアリマス。私モ同ジ氣持デアリマス。

- (5) 陛下 ポツダム宣言ヲ正確ニ履行シタイト考ヘテ居リマスコトハ、先日、侍従長ヲ通ジ閣下ニオ話シタ通りデアリマス。

マ元帥 終戦後、陛下ノ政府ハ誠ニ多忙ノ中ニ不拘、凡命令ヲ一々忠実ニ実行シテ余ス所ガナイコト、又幾多ノ有能ナ官吏ガ着々任務ヲ遂行シテ居ルコトハ、賞讃ニ値スル所デアリマス。又聖断一度下ツテ日本ノ軍隊モ日本ノ国民モ全テ整然ト之ニ従ツテ見事ナ有様ハ、是即チ御稜威ノ然ラシムル所デアリマシテ、世界ノ何レノ国ノ元首ト雖モ及バザル所デアリマス。之ハ今後ノ事態ニ処スルニ当リ、陛下ノ御氣持ヲ強ク力付ケテ然ルベキコトカト存ジマス

申上グル迄モ無く、陛下程日本ヲ知り日本国民ヲ知ル者ハ他ニ御座居マセヌ、從テ今後陛下ニ於カレ、何等御意見乃至御氣付ノ点 (Opinion and advice) モ御座居マスレバ、侍従長其ノ他然ルベキ人ヲ通ジ御申聞ケ下サル様御願致シマス。ソレハ私ノ参考トシテ特ニ有難ク存スル所デ御座居マス。勿論全テ私限りノ心得トシテ他ニ洩ラスガ如キコトハ御座居マセンカラ、何時タリトモ又如何ナル事デアラウト、隨時御申聞ケ願ヒ度イト存ジマス。

- (6) 陛下 閣下ノ使命ハ東亞ノ復興即チソノ安定及繁榮ヲ齎シ以テ世界平和ニ寄与スルニ在ルコトト思ヒマスガ、コノ重大ナル使命達成ノ御成功ヲ祈リマ

ス。

マ元帥 夫レ（東亞ノ復興云々）ハ正ニ私ノ念願トスル所デアリマス。只私ヨリ上ノ權威（オーソリテイ）ガアツテ、私ハソレニ使ハレル出先（エージェンシー）ニ過ギナイノデアリマス。私自身ガソノ權威デアレバト云フ氣持ガ致シマス。

(7) 陛下 閣下ノ指揮下ノ部隊ニヨル日本ノ占領ガ何等ノ不祥事無ク行ハレタコトヲ、満足ニ存ジテ居リマス。此ノ点ニ於テモ、今後共、閣下ノ御尽力ニ俟ツ所大ナルモノガアルト存ジマス。

マ元帥 私ノ部下ニハ苛烈ナ戦闘ヲ經テ来タ兵士ガ多勢居リマシテ、戦争直後ノ例トシテ上官ノ指示ニ背キ事件ヲ惹起スル者ガ間々居リマスガ、此ノ種ノ事件ヲ最小限ニスル為ニハ十分努力スルツモリデアリマス。

(8) 陛下 以前ニモ日本ニ御出ニナツタ様ニ聞イテ居リマスガ、何時頃デシタカ。

マ元帥 私ト東洋トノ關係ハモウ四十年ニナリマス。最初ハ一九〇五年日露戦争当時デ、父ガ大山元帥ノ下ニ従軍シ、私ハ父ノ副官トシテ参リマシタ。ソノ關係デ大山元帥、乃木大将、黒木大将等数々ノ日本ノ偉大ナル人物ヲ知ツテ居リマス。黒木大将ガ米国ニ派遣セラレタトキハ、私ト共ニ政府ノ命ヲ受ケテ案内役ヲ致シマシタ。又、タウンゼント・ハリス祭ニ出羽海軍大将ガ派遣セラレマシタ際ニモ、接伴致シマシタ。コノ前東京ニ参リマシタトキハ、比島ノケソン大統領ト一緒デ御座居マシテ、コノ米国大使館ニ居リマシタ。ケソンガ謁見ヲ賜リマシタコトハ陛下モ御記憶ノコトト存ジマス。

陛下 ソレハ好ク覺エテ居リマス。

マ元帥 ケソンハ肺ヲ病ンデ居リマシタ。戦争勃發後比島ヲ去リ、暫時濠州ニ滞在ノ後米国ニ渡リマシタガ、病兀ジテ約一年前死亡致シマシタ。ケソンノ死ハ東洋ノ為ニ大ナル損失ト存ジマス。彼ハ平和ノ士デアリ、困難ナ事態ヲ穩ニ取マトメ得ル人物デアリマシタ。

陛下 夫人モ最近御到着ニナツタサウデスガ御元氣ノ事ト存ジマス。

マ元帥 御言葉有難ク存ジマス。マタ御花マデ賜リ感謝致シテヨリマス。ジツハ七歳ニナル愚息モ参リマシテ、マニラニ比ベテ此ノ氣候ヲ共ニ樂シンデ居リマス。愚息ハ近頃小サナ日本犬ヲ飼ヒ始メマシテ、大悦ビデゴザイマス。

陛下 日本ノ秋ハ良イ氣候デアリマスカラ、夫人ノ為ニモ亦永イ間酷熱ノ地ニ居ラレタ閣下ノ為ニモ、御氣持ノ良イコトト存ジマス。

マ元帥 有難ク存ジマス。日本ノ秋ニハ度々参リマシテ、其ノ好サハ十分存ジテ居リマス。只ココニ居リマスと、周リノ荒廃ガ余リ酷クテ、昔ノ東京ノ氣分ハアリマセン。少シ田舎ヘデモ車デ行ケバ、破壊モ少ナク、昔ノ懷シイ有様ニ接スルコトガ出来ルカモ知レマセヌ。

陛下 日本ニ御滞在中モット御会ヒスル機会モアルコトト存ジマスガ、御忙シイコトト思ヒマスカラ、今日ハ之デ御別レシマス。

マ元帥 先刻申上ゲマシタ通り、今後何カ御意見ナリ御氣付ノ点モ御座居マシタナラバ、何時デモ御遠慮ナク御申聞ケ願ヒ度ク存ジマス。本日ハ行幸ヲ賜リ、破格ノ光榮ト存ジマス。

陛下ヨリ再ビ御握手ヲ賜リ、元帥ノ御案内ニテ控ヘノ間ニ玉歩ヲ進メ給ヒ、此処ニテ陛下ヨリ元帥ニ対シ宮内大臣、侍従長、侍医、行幸主務官ヲ御紹介アリ。元帥夫々握手ヲ行ヒタル後、玄閑迄陛下ヲ奉送ス。

(此ノ間約三十七分。奥村謹記)

この記録は児島襄「天皇とアメリカと太平洋戦争」(『文藝春秋』一九七五年二月号)の中ではじめて紹介された。児島氏は取材源を明らかにせず、また、原文に手を加え、「一部字句を当用漢字および仮名に書き直してある」と注記している。なお、会談のテーマごとに記した(1)、(2)などの数字は、他の諸資料と比較検討する際の便宜上、松尾が付したものである。

この「御会見録」を、多くの論者は「手記」とか「メモ」とか称するが、それは妥当ではない。これこそ日本政府が秘匿しつづけている正式の記録に他ならない。その証拠の第一は『朝日ジャーナル』一九八九年三月三日号が発表した国立国令図書館幣原平和文庫所蔵の天皇・マッカーサー第三回会見録と書式において一致していることである。念のため第三回会見録の冒頭と末尾の部分を左に示そう。

「マッカーサー」元帥との御会見録

昭和三十一年十月十六日(水) 午前十時十五分 於米国大使館

松平宮内大臣、大金侍従長、寺崎御用掛扈從

定刻米国大使館に御到着、玄関「ステップ」にて「フィラー」大佐御出迎へ、玄関にて「マッカーサー」元帥御出迎へ御握手、御挨拶交換後、元帥の御先導にて奥の間長椅子に御着席、元帥はそれに近き椅子に着席す。

陛下 久し振りに御目に懸り嬉しく存じます。今年の夏は激しい暑さでありましたが、御障りも無く結構であります。

元帥 永らく熱帯に居りました関係上東京の夏は楽でありました。東京滞在は早くも一年以上になりますが、氣候が良いので家族一同喜んで居ります。

(中略)

陛下 この前頂戴した「チョコレート」も皇太子初め皆でおいしく戴きました。

その中に、日本の菓子を令息に上げ度いと存じます。

元帥 有難う御座います。嬉んで頂戴致します。

右にて御会談を終り、陛下の立ち上り給ふや、元帥は「御案内申上げませう。」とて、陛下に寄り添ひ玄関迄先導す。玄関にて御握手、別れの御挨拶交換後、御乗車あらせらる。時に十二時七分

寺崎御用掛謹記

第二の証據は会談内容が、他の諸資料と矛盾しないことである。例外としては後述の、一九八九年二月六日・七日付の『朝日新聞』夕刊掲載の豊下櫛彦「天皇とマッカーサー会見」の検証」が紹介した一九四五年一〇月二日付『ニューヨークタイムス』記事、および、これに依據したと思われるH・E・ワイルズ『東京旋風』（一九五四年）の叙述であるが、これらは後で詳述するように、日本政府内務省のスポークスマンが、ある政治的意図のもとに、「御会見録」の内容をゆがめて公表したものに他ならない。

この「御会見録」を除いて、会談の全容をうかがわせる資料は存在しない。これこそ、この歴史的会見について考察するものにとって、唯一無二の根本資料であるといわねばならない。しかし「御会見録」さえあれば、会談の内容が正確に判明するかといえば、そうではない。「御会見録」は三七分間の会談の速記録ではない。奥村が会見直後に記憶——メモをとっ

ていた可能性はある——をもとに作成した要領筆記なのである。会談冒頭の約二〇分にわたるマ元帥の演説は六〇〇字に要約されている。会談の核心たる天皇の戦争責任問題にしても、「コノ戦争ニツイテハ、自分トシテハ極力之ヲ避ケ度イ考デアリマシタガ、戦争トナルノ結果ヲ見マシタコトハ、自分ノ最モ遺憾トスル所デアリマス」とあるだけである。天皇の肉声のままであるかどうか、検討を必要とする。

したがって、ここでは内容について考察は加えず、他の資料を検討したあと、もう一度本資料に立ちかえり、会談内容の確定を試みたい。

2 『木戸幸一日記』

①本日マックアーサーと会見の際、マ元帥は「国民及び政界の要人等につき一番御承知なるは陛下なりと信ず。就ては今後も種々御助言を得たし」との意味の話あり、マ元帥は侍従長を以てと云ひ居たるが、之は都合によりては自分が会ひてもよし、又内大臣が使ひしても宜しからんと思ふから、其積りで考へて置く様にとの御言葉ありたり。②尚、マ元帥は陛下が終始平和の為に努力せられたるは充分判り居る旨、先方より話し居りたり云々。（○印は松尾が付けた）

『木戸幸一日記』（東京大学出版会、一九六六年）九月二七日の条によれば、「十一時五分より同四十五分まで御文庫にて拜謁、今朝マ元帥御訪問の際の御模様等につき御話ありたり」とあり、別紙にその内容が右のごとく記載されている。天皇は一〇時四五分に皇居に帰ると、心配して待ち受けていた木戸内大臣に、直ちに会見の模様を話したのである。

これは天皇が自ら会見の模様を話した唯一の資料として注目される。相手が木戸であるだけに天皇の話に作為は認められない。①は「御会見録」の(5)に、②は(3)に照応し、「御会見録」の信憑性を裏づける。マ元帥の発言中この二点が天皇に

とって重要であったのである。①はマ元帥が天皇が占領に必要であることを示し、天皇の地位保全を認めたものであり、②は天皇を戦犯視していないことを示すものである。ともに天皇を安心させるものであった。①の後半は天皇がマ元帥の「御助言を得たし」の言に気をよくして、積極的にマ元帥に協力するつもりであったことを物語る。これ以後天皇のマ元帥訪問は十回に及ぶが、これが天皇の自発的意思にもとづくことも暗示している。

3 『ニューヨーク・タイムズ』所載 内務省スポークスマン談

マッカーサー、裕仁を満足さす——側近は語る

日本のスポークスマンは、今や元帥の天皇訪問が期待されると語る。

①東京、一〇月一日（ロイター）——太平洋連合軍総司令官ダグラス・マッカーサー元帥と、日本の裕仁天皇との会談の秘密が、本日、部分的に明らかにされた。両者は日本占領を円滑に行う方法について相談したのである。

日本政府内務省のスポークスマンはいう。マッカーサー元帥は天皇に深い感銘を与えた。天皇はこれまでの占領の経過に「充分満足している」と表明した。「マッカーサー元帥は、天皇のどのような日本再建に関する提案でも歓迎する、と語った」とスポークスマンは付言した。

マッカーサー天皇訪問への期待

会談はもっとも心のこもったものであった。スポークスマンはさらに次のように語る。日本の民衆はマッカーサー元帥に悪意を抱いていない——彼はこう強調する——が、将軍が返礼のため皇居を訪問することを期待している。

②マッカーサー元帥と裕仁との会談の一節が内務省のスポークスマンによって公表された。いわく、天皇はこの機会に、「一つの事故もなく」日本占領を実

現したマッカーサー最高司令官に感謝の意を表明した。

③これに対し、マッカーサー元帥は、円滑な占領は天皇のリーダーシップのおかげであると答え、流血なしに占領が行われたことに大いに感謝していると付けくわえた。

④マッカーサー最高司令官と裕仁天皇とは、もし武力侵攻が実行されたなら、日米双方に多くの人命が失われ、日本の完全な破滅に終ったであろうという点で、完全に意見が一致した。⑤天皇はマッカーサー元帥が誰に戦争責任があるかについてまったく言及しなかったことに、とりわけ感動した。

⑥天皇は個人的見解として、最終的な判断は後世の史家に委ねなければならぬだろうといったが、マッカーサーは何の意見ものべなかった。

彼らは占領方式について相談した。

⑦裕仁とマッカーサー元帥とは連合国によってとらるべき、さまざまな占領方式について相談した。⑧天皇はこれまでの占領の経過に充分満足していると表明した。

⑨マッカーサー元帥は、陛下の日本再建についての提案は、どのようなものでも歓迎します、と述べ、その提案が連合国側の政策と一致すればできるだけ早く実行に移される旨を約束した。⑩スポークスマンは次の点を強調して話を終えた。すべての日本人はマッカーサー元帥にいささかの悪意も抱いていない。

日本人は皆、最高司令官が返礼のため皇居を訪問するものと心から期待している。

もし訪問が実行されたら、マッカーサー將軍は現天皇を訪問した外人將軍としては一九二五年のベタン元帥以来はじめての例となる。(○印は松尾が付した)

この記事は一九四六年一〇月二日付の『ニューヨーク・タイムズ』の第五面に掲載され、前出豊下櫓彦「天皇とマッカーサー会見」の検証」がはじめてその内容を要約紹介した。

記事冒頭の①の部分は記事全体の要旨である。一見明らかなごとく、天皇とマ元帥の対話がいかにも平等な立場で行われたかの如くい、マ元帥の皇居訪問答礼を当然のごとく主張する内務省スポークスマンの発言は、「御会見録」その他の資

料とは大きく異っている。たしかに注目し値する資料であるが、会見の内容をつたえる資料としては、「御会見録」と対等な資格を有するものではない。いったいスポークスマンは何を材料として記者発表を行ったのか。考えられる取材源は天皇と奥村の二人に限定されるが、天皇自らが会見内容を内務省につたわるかたちで語ることはいえぬ。また奥村が守秘義務を忘れて、内務省筋に会見内容をもらすことも考えられない。万一、ありえたとしても、奥村が自ら「会見録」に記したことと異なる内容をつたえるであろうか。のこる可能性としては「御会見録」のコピーが内務省の手に渡り、これをスポークスマンが手を加えて発表したことだけである。

実際に内容を逐一「御会見録」と照合してみると右の推定が裏付けられる。②は「御会見録」の(7)と、③は(5)と、④は(2)と、⑧は(7)と、⑨は(5)とそれぞれ対応している。スポークスマンが「御会見録」を下敷にしていることは疑いない。それならば対応しない部分のあることをどう解すべきか。

⑥において、戦争責任の最終判断を後世の史家に委ねると天皇が発言したとするのは、まったく発言者のスリカエというほかはない。⑦では、勝者と敗者との間で「占領方式について相談」するなど、ありうべきことではない。この⑥・⑦の作為部分で共通しているのは、あくまで両者の立場が対等であるかのような印象をつくり出していることである。

内務省はどうしてこのような重大な作為をふくむ記者発表をあえて行ったのであろうか。一〇月一日発表という時期に注目されたい。前述のように、九月二十九日、政府はマ元帥との会見写真と外人記者会見記事を掲載したという理由で三新聞を発行禁止処分²⁰に付し、GHQは即日この禁止処分を解除した。写真で傷つけられた天皇の尊厳を回復するために、政府側は、あくまで天皇・マ元帥の両者対等を印象づけるべく会談内容を歪曲し、マ元帥を皇居答礼訪問を催促、外人記者に発表したのではなからうか。この敗者の位置を自覚できぬ時代錯誤ともいふべき日本政府に向かって、改めてつきつけられたのが、一〇月四日のいわゆる「人権指令」であり、内相以下内務省首脳²¹の罷免要求であった。繰返しとなるが、この「内務省ス

ポークスマン談」なる記事は、一種の政治文書であり、その背景は興味深いが、会談内容の真実に接近するのにはほとんど役立たない。

4 イギリスBBC放送

陛下並にマックアーサー元帥はもし戦争が継続し聯合軍が武力を以て日本本土に侵入してゐたとすれば、日本及び聯合軍雙方の死傷は甚大なものとなり、日本は完全に破壊されてゐたであらうといふ点で意見を同じくされた。陛下とマックアーサー元帥とは次に聯合軍の占領方式について種々話され、陛下は現在までの進行状況は「極めて満足である」旨仰せられた。次いでマックアーサー元帥は陛下に対し「陛下が日本の復興に関して何らかの御意見をお持ちならばいかなることでも歓迎致します」と語り「もし、陛下の御意見が聯合國の政策に適合しておれば出来るだけ速かに実行に移す」旨御約束申上げた。

右はロンドンのBBCが一〇月一日に放送したものを、同盟通信が配信し、『朝日新聞』・『毎日新聞』その他の一〇月三日付のトップ記事となったものである。『朝日』は「日本復興の御意見／聯合軍も歓迎／聖上、マ元帥御訪問の模様」、『毎日』は「天皇陛下、マ元帥御訪問の模様」の見出をつけている。豊下論文の指摘するように、これは前記「内務省スポークスマン談」を基礎としているが、天皇の戦争責任をめぐる発言と、マ元帥の答礼問題が脱落している。この脱落がBBC放送自体によるものか、配信者によるものか、あるいはすでに始まっていたであろうGHQの検閲によるものかは不明である。内容においては重要性をもたぬが、GHQが天皇に対して宥和的な姿勢を示していると読者に印象づけている点が注目される。

5 H・E・ワイルズ『東京旋風』

この会見は秘密になっていたが、通訳を通じて、双方の主役がどちらも固くなっていたという話が洩れた。マッカーサーは裕仁の出方次第という態度をとった。天皇はまずアメリカ軍が平和裡に占領を進めてくれたのを感謝することから始め、マッカーサーは鄭重に、それはまったく裕仁の協力に負うものだと答えた。十五分間あまり、ぼつりぼつりと言葉の上のフェンシングがつづけられたが、マッカーサーは自分の方から先に口をきくことを避けていた。そのうち、天皇は、おずおずと、将来の歴史家は戦争の責任について、なんというだろうか、それがわかればおもしろいだろうといった。マッカーサーはそのとき、机の上に、できるだけ早く戦犯裁判を始めるようにというワシントンからの命令書を置いていたが、天皇の言葉には返事をしなかった。そこで天皇は、いちばん大切な問題をいちばんあとから持ち出す日本人の習慣にしたがって、いちばん重要な退位問題について、マッカーサーの意見を求めた。マッカーサーはその質問にも回答を避けた。裕仁はまるっきりなにひとつ探り出せないままで、三十八分間の会見を終って退出した。

マッカーサーは、ただちに詳細な報告をワシントンに電報し、天皇が戦争犯罪に言及したことも、退位を暗示したことも、ことごとく報告した。マッカーサーがその回答を待っているうち、裕仁は、大使館を訪問した五日後、再び前例をやぶって、UP通信社の社長ヒュー・ベリーとニューヨーク・タイムズのフランク・クラックホーンを引見した。この二人の新聞記者を通じて、天皇は慎重周到な言葉づかいをした声明書をアメリカ国民に送り、その中で日本は英国風の立憲君主制になろうとしていることをほめかした。

Harry E. Wildes, *Typhoon in Tokyo*, Allen and Unwin, Macmillan 1954. の抄訳が井上勇訳『東京旋風』（時事通信社、一九五四年）であるが、右の部分（二〇五―六ページ）は全文ほぼ正確に訳されている。ワイルズは戦前から知られた日本研究家で、戦後はGHQ民政局に勤務し、GHQ憲法草案の人権条項の起草に関係した（古関彰一『新憲法の誕生』中央公論社、一九八九年、一〇七ページ）。この経歴にしてはこの記述には誤りが多い。前記内務省スポークスマン談を下敷にしていることは明らかであるが、マ元帥が机の上に戦犯裁判早期開始の命令書を置いていたとか、天皇が退位問題を持出したとか、マ元帥が会談内容を本国に詳報したとか、会見のあと五日後に天皇が両記者を引見したとかはすべて事実と反する。GHQ内部の人間にも会見

内容はもらされていなかったことをこの資料は物語るとともに、如上の誤報の出所については興味をそそられる。外人記者引見の日付は別として、GHQ内部にこのような噂があったのではあるまいか。

6 藤田尚徳『侍従長の回想』

陛下とマ元帥が二人で何を語られたか、これは明らかにされていないが、後日になって外務省でまとめた御会見の様子が私のもとに届けられ、それを陛下の御覧に供した。通常の文書は、御覧になれば、私のもとへお下げになるのだが、この時の文書だけは陛下は自ら御手元に留められたようで、私のもとへは返ってこなかった。宮内省の用箋に五枚ほどあったと思うが、陛下は次の意味のことをマ元帥に伝えられている。①「敗戦に至った戦争の、いろいろの責任が追及されているが、責任はすべて私にある。文武百官は、私の任命するところだから、彼らには責任はない。

②私の一身は、どうなろうと構わない。私はあなたにお委せする。③このうえは、どうか国民が生活に困らぬよう、連合国の援助をお願いしたい」
一身を捨てて国民に殉ずるお覚悟を披瀝になると、この天皇の流露はマ元帥を強く感動させたようだ。

④「かつて、戦い敗れた国の元首で、このような言葉を述べられたことは、世界の歴史にも前例のないことと思う。⑤私は陛下に感謝申したい。占領軍の進駐が事なく終ったのも、日本軍の復員が順調に進行しているのも、これすべて陛下のお力添えである。これからの占領政策の遂行にも、陛下のお力を乞ねばならぬことは多い。どうか、よろしくお願い致したい」(○印は松尾が付した)。

これは当時侍従長の職にあった海軍大将藤田尚徳の『侍従長の回想』(講談社、一九六一年)の一節である。『マッカーサー回想記』と同様、引用されることが多い。

藤田は、あたかも「御会見録」を読んだ記憶だけにしたがってこの文章を書いたようにいっているが、これは事実に反する。なぜならば⑤を除いて、「御会見録」には同じような表現の文章は存在しないからである。それならば藤田は直接天皇

から会見の様様を聞いたのであろうか。その可能性は否定できないが、天皇はいかに侍従長とはいえ臣下に対してこのような会見内容を物語るものであろうか。藤田は別の資料にも依拠した可能性が濃い。①と②の部分は後述の重光葵「天皇陛下賛えるマ元帥」『読売新聞』一九五五年九月二四日、②と③は当時内大臣秘書官長であった松平康昌の「陛下が最初にマッカーサーを訪問されたときも、自分の一身はどうなってもかまわない、たゞ国民のこと、国家の復興ことだけをよろしく頼む、といわれたという話ですから」(松平「天皇・嵐の中の二十五年」『文藝春秋』一九五五年一月号)と内容において一致する。総じて、侍従長と内大臣秘書官長という関係からして、後述のごとくキーン検事を通してマ元帥の語る「天皇発言」を聞いた松平の情報が頭に残っていたものと推測される。④は他資料に見られぬが、「御会見録」(5)の「聖断一度下ッテ」軍隊も国民も整然とこれに従った有様は「世界ノ何レノ国ノ元首ト雖モ及バザル所デアリマス」を換骨奪胎したのではあるまいか。

五 会談の内容 その二

アメリカ側からの資料の出所はもとよりただ一つ、マ元帥だけである。唯一の例外として、カーテンの内側からマ元帥夫人・子息とともに会見をのぞき見していたエドバーク医師の証言(注18をみよ)があるが、あまり証言としての価値はない。

1 バワーズ「天皇・マッカーサー会見の真実」

会見直後のマッカーサー元帥は沈痛な面持ちでした。陛下を見送った後、私とフェラーズ准将が部屋に入ると、元帥は夫人と私たち三人の肩に手をかけこういったのです。「私は民主主義者として生まれ、共和国民として育ち、反王政主義者なのだが、位を極めたあれほどの人物が、かくも落ちぶれているのを見ると、心が痛み苦しくなる」

そういうと、くると向きを変えて二階に上がって行き、昼食にも下りて来ないで一時間ばかり一人で考えることをしていたようです。なぜなら、陛下は、「すべての事は私の名のもとになされたのだから私が全責任をとる。だから、東郷や東条や重光らを罰せずに、私を罰せよ」

といわれたからです。当時、国務省関係者やトルーマン大統領周辺は、天皇は戦犯として裁判で裁かれるべきだと考えていました。ですから、マッカーサー元帥は天皇の申し出を決して喋りませんでした。ワシントンがこの話を知るのを望みませんでした。もしトルーマンがこの話を聞きつけたなら、

「そりゃいい考えだ。彼をすぐ絞首刑にしろ」

というに決っていたからです。

右はマ元帥の専属通訳たるフォービアン・バワーズ大尉が「天皇・マッカーサー会見の真実」と題して『文芸春秋』（一九八九年四月発行特別号「大いなる昭和」）に掲載したものの一節である。天皇の発言をいつマ元帥から聞かされたかはばかしている。ところが、本人は同じころNHKのインタビューにおいてマ元帥からの直話として次のように語っている。（一九八九年五月三日放映「憲法の一〇〇年」）

マッカーサーは天皇が「退位させないでくれ」「逮捕しないでくれ」と言うと思った。すぐに、うちとけてたばこを吸いながら天皇は言った。「巣鴨刑務所にいる人にかわり、私の命を奪ってください（hang me）。彼等の戦争中の行為は私の名においてなされた。責任は私にある。彼らを罰しないでほしい。私を罰してください」。（画面の字幕、（ ）内は音声）

うちとけてタバコを吸いながらの話としては深刻にすぎる内容であるが、タバコの件もふくめて、バワーズの回想はあまりに後述のマ元帥の回想に類似している。コロンビア・オーラル・ヒストリー「フォービオン・バワーズの回想」によったと明記する前出袖井林二郎『マッカーサーの二千年』（九三ページ）では二階に上る前のマ元帥の言葉だけをつたえ、天皇発言

については何も記していない。「三人の肩に手をかけて」というあり得ない話も記していない。マッカーサーが「天皇の申し出」を決して喋りませんでした」というのもウソである。もしこれがマッカーサーの直話だとすると、この「申し出」は後述のアチソン覚書のつたえる天皇発言の後半のみをマッカーサーが増幅して語ったのであろう。マ元帥の側近の証言だが、鵜呑みにはできない。

2 フェラーズ覚書

一九四二年二月八日の宣戦の詔勅について、天皇は責任を免れることはできない。天皇は当時は独立国であった一国家の元首として、宣戦の詔書を発する法的権限をもっていた。最上層のもっとも信頼できる筋によって、戦争は天皇自身に起因するものではないと立証できる。天皇本人が宣戦の詔書を東条が使ったようにには使わせるつもりはなかったと語っている。

これは会見五日後の一〇月二日にマ元帥の軍事秘書 Bonner F. Fellers 准将がマッカーサーに提出した覚書の一節である（原文はスタンフォードのフーヴァー研究所蔵）。フェラーズは戦前以来の知日派で、旧知の河井道子（著名なクリスチャン、恵泉女学園創立者）や関屋貞三郎（もと宮内次官の枢密顧問官）の示唆を得て、マッカーサーの天皇対策に資すべく、この覚書を提出した（高橋紘『象徴天皇』岩波新書、一九八七年、三一ページ）。マ元帥がこの覚書をもとに、一九四六年一月二五日、アイゼンハワー参謀総長あてに、天皇を戦争裁判にかけることに反対する旨の回答を行い、アメリカ政府の天皇制維持政策を決定的たらしめたことは有名である。

「天皇本人が語った」(He has personally said)とは誰に語ったのだろうか。「宣戦の詔書」を東条が使ったようには使わせるつもりはなかった」とは、前記『ニューヨーク・タイムズ』（九月三日）のクラックホーン記事の表現に余りにも類似してお

り、フェラーズがこの記事をもとにしているとも考えられる。しかしマッカーサーが側近たるフェラーズに天皇との会見内容をもたらすことは充分ありうることであり、豊下論文のいうように、この部分は「天皇との会見で得られたマッカーサーの『情報』と推定してよい。このマッカーサー情報による『天皇発言』は次に掲げるアチソン覚書中の『天皇発言』の前半と趣旨において同一である。

3 アチソン覚書

マッカーサーは今日、私に次のように語った。裕仁がマッカーサーを訪問したとき（一九四五年九月二七日）、天皇はマッカーサーが待っていた大使館の応接室に入ると最敬礼した〔bowed to the waist〕。握手を交し座ったあと、天皇はいった。「私は合衆国政府が日本の宣戦布告を受取るまえに、真珠湾を攻撃するつもりはなかったが、東条が私をだましたのだ〔tricked〕。しかし私は責任を免れるためにこんなことをいうのではない。私は日本国民の指導者であり、国民の行動に責任がある」。

会見一月後の一〇月二七日、国務省派遣のGHQ政治顧問 George A. Atcheson は、極秘電報をもって右の「覚書」を国務省に送った。この資料は「会谈覚書／米国に対する宣戦布告のタイミングについて、東条が天皇をだましたとの天皇の言明」の表題をつけて、米国立公文書館に所蔵されている。すでに泰郁彦『裕仁天皇五つの決断』（講談社、一九八四年、一八四ページ）、および『朝日新聞』一九八六年二月八日付で内容が紹介されている。

この資料では、天皇は東条に責任を転嫁するだけではなく、日本国の指導者としての責任はとると発言したことになる。豊下論文は「アチソン・メモを全体としてみるならばそれは、「免れ得ない」天皇の法的責任と東条の実質責任を指摘したフェラーズ・メモの内容をマッカーサーが「天皇発言」としてアチソンに伝えたもの」としている。しかし、天皇が名指し

て東条を非難したかどうかは別として、大要このような発言をしたことを否定はできないであろう。天皇が東条に責任をかぶせるだけの発言にとどめたなら、マ元帥が退任後とはいえあれほど天皇の態度を賞揚することはなかったのではあるまいか。この点はさらに最終章で検討する。

4 ヘレンセン報告とブレイクスリー『極東委員会』

マッカーサー元帥は、かねてから天皇と数回会見し、天皇に好感を寄せています。天皇は、みずからの顕職にともなう責務を自覚し、みずからの行動に進而全責任を負う覚悟をもち、強い職責感から皇位にとどまるのが道義上の義務であると考えており、それが主たる理由で現在なおその地位にあるというこ
とです。(中略)

マッカーサー元帥は、詔勅によって戦争を終わらせたと同様、開戦を禁じることも可能であると考えなかった理由を説明するよう天皇に迫りました。天皇の答えによれば、戦争を終わらせたのは天皇ではない——天皇を法律上の道具として利用した助言者であり、天皇は開戦に賛成ではなかったものの、彼も(また、たとえ如何なる人物が天皇であったとしても)、戦争開始当時の政界の声や世論の圧力にたいして有効に抗することはできなかったであろう、というのでした。(中村政則訳)

これは、一九四六年一月二九日、来日中の極東諮問委員会のメンバーにマ元帥が語った内容を、ニュージーランド代表委員の C. A. Berendsen が本国に報じた文書の一節で、中村政則「日本占領と天皇制」『歴史学研究』(一九八九年二月号)がはじめて紹介した。(原文は R. Kay ed, *The Surrender and Occupation of Japan: Documents on New Zealand External Relations*, Vol. III, 1982, p. 325)

また George H. Blakeslee, *The Far Eastern Commission: A study in International Cooperation: 1945 to 1952*, The Department of State, p. 20 にはマッカーサー演説の次の要約がある。

マ元帥は天皇に次のようにたずねた。天皇が戦争を終らせたと一般に信じられている。それならばなぜその力を開戦回避のため行使しなかったのかと。天皇は驚いた顔つきでこういった。いかなる天皇でも大臣たちの助言や世論に抗することはできないと。マ元帥は天皇を、育ちのよい、血統のよい、道徳的勇氣をもつ——ただし幾分健康は良くないが——若者だと説明した。

豊下論文はこの「天皇発言」の趣旨が、前記マ元帥の陸軍参謀総長あて一九四六年一月二六日付回答電報中の次の文章

できる限り手を尽くした調査から、天皇の終戦時までの国務とのかかわりは主として行政上のことであり、彼の輔弼者たちの助言に機械的に応じたものであった、との明確な印象をうけた。仮りに天皇が積極的な考えをもっていたとしても、支配的な軍閥によってあやつられ、その意向を代弁している世論の流れに反対しようものなら、そのような彼の努力は、實際上危険な状況に彼を立たせたであろうと信じている人達がいる。

と一致していることから、ワシントンへのマ元帥の回答電報の重要部分がマ元帥により「天皇発言」として紹介されたものとし、この「天皇発言」がはたして天皇の実際の発言であるか疑問を提出している。この鋭い指摘に私も同感である。付言すれば、このような理詰め、また弁解がましい発言をする時間はなかったし、またこのような発言があったとすれば会見二日後に天皇がマ元帥にさらに「真意」をつたえたいといい出す必要はなかったであろう（最終章で詳述）。「御会見録」の(3)にはマ元帥の発言として「一般ノ空氣ガ滔々トシテ或方向ニ向ヒツツアルトキ、別ノ方向ニ向ツテ之ヲ導クコトハ、一人ノ力ヲ以テハ為シ難イコトデアリマス」とあるが、マッカーサーはこの自分の言葉を天皇の発言にすりかえてみせたのであるまいか。

このマッカーサー演説で注目されるのは、わずか一回の会見にもかかわらず、わざわざ数回会った (several interviews) といわった上で、天皇の資質を極力賞揚していることである。天皇制維持対策の必要上とはいえ、マッカーサーが天皇に抱い

ている好感を明確に示すものである。

5 ラウターバック「秘密日本戦争計画」

裕仁がマッカーサー元帥を訪問したとき、元帥は「なぜ、あなたは戦争を許可したのか？」とたずねた。天皇は、元帥があたかもかけだしの新聞記者でもあるかのように、うたがい深い目つきで元帥をみつめながら、ゆっくりとこういった。「もし私が許可しなかったら、彼らは新しい天皇をたてたことでしょう。戦争は日本人民の意志でした。あの時どんな天皇でも、この人民の希望に反対することはできなかった。

これは『ライフ』一九四六年三月四日号に掲載された Richard E. Lauterbach “Secret Jap War Plans” の末尾の一節である。この出所が次の NHK 「真相箱」とともに、前記極東諮問委員会一行に対するマ元帥演説であることに間違いない。

6 NHK放送「真相箱」

「なぜあなたは戦争を許可されたのですか」という元帥の問いに対して、「元帥の顔を見つめられた陛下はゆっくり、もし私が許さなかったら、きっと新しい天皇がたてられたでしょう。それは国民の意思でした。事、ここに至って国民の望みにさからう天皇はおそろくないのでありましょう」といわれたのであります」。

これは一九四六年五月五日の NHK ラジオ番組「真相箱」の放送である。これを紹介した週刊新潮編集部『マッカーサーの日本』（新潮社、一九七〇年、二五九ページ）によれば、「これは、GHQ 民間情報教育局が責任をもって製作・放送した脚本そのままである」という。前資料同様、開戦を拒否したら退位させられただろう、と表現がオーバーとなっている。

7 田中隆吉「かくて天皇は無罪となった」

建国以来、日本人はこの尊厳無比の国体を護持するために、多数の日本人の鮮血を流してきた。天皇陛下が有罪にならせ給えば、日本は独立を保つことはできぬ。心配になった私は、キーンナン首席検事に対して、天皇についてどのように考えているのか、とたずねてみた。意外にもキーンナン首席検事は次の如く答えた。

「(中略) 日本に到着して、マッカーサー元帥に面会した際、マ元帥はこういった。『自分は昨年九月末に、日本の天皇に面会した。天皇はこの戦争は私の命令で行ったものであるから、戦犯者はみな釈放して、私だけ処罰してもらいたいと言った。もし、天皇を裁判に付せば、裁判の法廷で天皇はどのように主張するであろう。そうなれば、この裁判は成立しなくなるから、日本の天皇は裁判に出廷させてはならぬ』

私はマ元帥の言もあり、日本にきてからあらゆる方法で天皇のことを調査したが、天皇は平和主義者であることが明らかとなった。(中略) 私としては、天皇を無罪にしたい。貴君もそのように努力してほしい」

この時ほど私は感激したことはなかった。私は死を賭して、天皇を無罪にするため、軍部の行動について、知る限りの真実を証言しようと決心したのである。

マッカーサー元帥と天皇陛下との会見の様子は、私が松平康昌式部長官から直接聞いたところによれば、次の如くであった。

その日、天皇は第一相互ビルの総司令部にモーニング姿で訪問されたが、マ元帥は出迎えなかった。天皇陛下がマ元帥に会見を申しこまれた時、マ元帥は来訪されてもかまわないが、出迎えも送らないとの返事であった。

天皇陛下がマ元帥の室に入ると、元帥は軍服姿で傲慢な態度で相対した。面会と同時に切々たる御言葉で、前述の如く、

「ボツダム宣言によると、日本人は戦犯として裁判されるのであるが、彼らは悉く自分の命令で戦争に従事した者であるから、この人達を釈放して自分を処刑してもらいたい」と仰せられた。

この神の如き態度に、マ元帥は感激した。そして、それまでは、天皇を「ユー」と呼んでいたが、直ちに「ユアー・マジェスティ」(陛下)と改めて尊敬

をこめて呼んだ。さらに、会見の終了した時には、天皇陛下を玄關に御見送りしたとのことである。

これは東京裁判の証人として天皇弁護に貢献した元陸軍省兵務局長田中隆吉が『文藝春秋』一九六五年八月号に掲載した文章「かくて天皇は無罪となった」の抄録である。キーナンと松平による「天皇発言」の内容は同一である。松平は会見当時内大臣秘書官長であり、天皇の口から出る情報を入手できる立場であったが、このような「天皇発言」は木戸日記にも記載されず、また天皇がもらすはずもないから、豊下論文の暗示するように、当時密接な関係にあったキーナンから聞いたものとみてよい。キーナンは、田中の記憶にしたがえば、「天皇発言」を一九四六年に入ってから、同年五月以前にマ元帥から聞いたことになる。その内容は前記アチソン覚書の後半を増幅させたものとなっている。前記藤田『侍従長の回想』のくだりで言及したごとく松平は矢次一夫に対し「自分の一身はどうなってもかまわない。ただ国民のこと、国家の復興のことだけをよろしくたのむ」といったと語っているが、これも出所はキーナンであろうか。ただし、松平が田中に語った「ユア・マジェスティ」とマ元帥が態度を改めたという話は、マ元帥自らが語るはずもなく、キーナンの創作の疑いがある。これが松平を介し、藤田『侍従長の回想』（二七四ページ）にある「マ元帥は、尊敬の念をもって『陛下』（ユア・マジェスティ）とお呼びしていた」につたわったと推定される。いずれにせよ、キーナンと松平の談話は田中証人を大いに感奮させ、天皇擁護の活動を行わせることになった。

8 バイニング夫人日記

「元帥は陛下に対して最初、厳しい態度で臨み、「戦争責任をおとりになるのか」と質問した。これに対し陛下は「その質問に答える前に、私の方から話をしたい」と切り出され、「私をどのようにしようともかまわない。私はそれを受け入れる。絞首刑にされてもかまわない」「しかし私は戦争を望んだことはな

かった。なぜならば、私は戦争に勝てるとは思はなかったからだ。私は軍部に不信感を持っていた。そして私は戦争にならないようにできる限りのことをした」——と述べられたという。

これは『東京新聞』（一九八七年一〇月三日）紙上で紹介された、皇太子家庭教師 Elizabeth G. Vining 夫人の、一九四七年一二月七日付の日記にあるマッカーサーの談である。

同じバイニング夫人は、一九八八年五月一七日、フィラデルフィア郊外の自宅で、共同通信社のインタビューに応じその中で、「滞日中、マ元帥と夫人は計六回会っており、二十二年五月、米国大使館の昼食会に招かれた時、元帥は二十年九月の天皇とマ元帥の初会見で故陛下が「貴下は私について思うままになされてよい。貴下は私を絞首刑にしてもよい。しかし私の国民を飢えさせないでほしい」と述べた、と会見の内容を明らかにした」（共同通信社一九八九年一月九日配信）。前記『東京新聞』記事の前半の繰返しだが、「私の国民を飢えさせないでほしい」の句はここではじめて現われる。一九四七年五月のマ元帥談話がどうして同年一二月の日記にあらわれるのか。また一九八九年五月のバイニング談話では、どうして『東京新聞』一九八七年一〇月三日付で紹介されたバイニング日記の天皇の弁明部分が脱落しているのか。豊下論文によれば一九四七年秋に彼女は約二カ月半帰国し、全米の主要都市をまわり、天皇の聖断で多くの米兵の生命が救われた、君主国イギリスのように天皇がいても日本の民主化は可能だと演説し、客観的にはマ元帥の意をうけた天皇制存続のためのキャンペーンとみられる行動をした、という。マ元帥は熱心なクエーカーたる彼女を通じての宣伝効果を期待し、「天皇発言」をもらしたのではあるまいか。彼の表現は誇張的で天皇の肉声を伝えるものとはいいがたいが、天皇が自己の責任を明らかにし、かつ戦争回避に努力したと弁明した事実まで否定することはできないであろう。

9 ケーリ『日本開眼』

九月の中ごろ、ヒロヒト天皇が、マックアーサー元帥を訪ねたときのことは、叔母から聞いて知っている。この叔母は、日本のキリスト教活動を援助するため、終戦の翌年から一年間日本にいた。帰米に際し、天皇に会ったが、マックアーサー元帥をも訪ねた。そのとき、たっぷり一時間、水入らずの会談をしたうちに、元帥自ら語る『天皇会見記』が出たのである。

マックアーサーは、はじめからワシントンからの命令通りに、天皇だけには手をつけないという方針を守っていた。しかし、天皇の方から会いたいというなら、別にことわる必要もないと思っただけ。例の、モーニング姿の天皇が、ネクタイなしのマックアーサーと並んでいる写真は、このインタビューのとき、撮られたものだ。大使館までいっしょについて来たのは木戸内府と、外務省の立派な通訳だった。マックアーサーの考えで、書齋のドアに入りかけていた木戸を、いっしょに横を歩いて副官がそと横にそらした。つまり、天皇とマックアーサー、それぞれの通訳、都合四人きりになったのである。問題になるのはマックアーサーと天皇で、あとの二人は単なる電話にすぎない。日本の天皇が、はじめて一人で、外国人と公式に会うことになったのだった。

この話を、マックアーサーは、例の弁論ぶり、堂々と三、四十分も私の叔母に述べたのだ。彼の演説はひとたび始めると、止まらないことを叔母は知っていたので、黙って聞いているより手がなかった。

天皇のほうが訪ねて来たのだから、マックアーサーとしては、別に天皇にいうことはなかった。しかし、一体何を話しに来たのだろうか、非常に興味を持った。外務省の通訳が大分うまかったので、マックアーサーの通訳は、確かめ役にまわり、遠慮していた。このときのことを、マックアーサーは「天皇は立派な人だ」と繰返して叔母にいった。戦争が終わってよかったという挨拶の後で、天皇はこういった。自分はどうなってもいいが、国民を食わせてやってくれ、と――。

はじめての、独りだけの重要会談に出掛けていった天皇は、前もって、いくら人に注意され予習していても、これだけのことはいえなかったろう。「国民を食わせてくれ」ということは、いろんな情報から判断して、常識で考えられるかも知れないが、「自分はどうなってもよろしい」ということは、自分から出て来たものに違いない。どんな日本人でも、まさか天皇に向かって「わしはどうなってもいい」といつてきなさいとは、いえるわけではなかった。天皇が

自ら考えたことに違いない。犠牲的精神は、東洋のお手のものにしろ、ああいう場所でいえたということは、ちょっとしたことだろう。マッカーサーは、犠牲になってもいいという言葉も、国民に食わせてくれという言葉も、天皇としては初めての言葉と解釈したらしい。(二〇七―二〇九ページ)

Otis Cary 氏は一九二二年日本生まれのアメリカ人。父・祖父とも日本在住の宣教師。アーモスト大学在学中太平洋戦争が勃発し海軍に入隊。日本占領に参加。一九四六年二月末帰国復学。翌年九月末アーモスト大学派遣教授として同志社大学に着任、今日にいたる。文中の叔母とはアリス・ケリー。アメリカ組合キリスト教会の極東担当主事であり、他の五人のキリスト教各派代表とともに日本基督教国援助のために来日した。来日直前の一九四六年夏に甥のケリー氏に会い、そのすめによって、翌年夏帰国前にマ元帥と会った。その模様を彼女は本国の教会に報じ、それを材料として『日本開眼』（法政大学出版局、一九五二年）の中でケリー氏は如上の文章を書いたのである（一九八九年九月二日ケリー氏談）。木戸内大臣とあるのは石渡宮内大臣のあやまり、通訳二人説もあやまりである。内容は同じ頃にマ元帥と会った前記バイニング夫人談とほぼ同様である。マ元帥はケリー女史にも、バイニング夫人同様の役割りを期待したものと推測される。

ところでケリー氏は後年もう一度この叔母の話を再現している（オーテス・ケリー「初公開「天皇人間宣言」を書いた男たち」『現代』一九八〇年一月号）。

九月二十七日のマッカーサーと天皇の最初の会見の模様について知ることができたのは、それから約一年度のことであった。マッカーサーは、人を前にして長々と語ることが好きな人であった。よく一時間のアポイントメントが一時半になったりして、部下を困らすこともあったらしい。マッカーサーとの会見の時には、本人より訪問者のほうが口数が多いことはまずなかったといってもいい。

（中略）

私の日本生まれの叔母は、当時ミッション関係の極東部長の地位にあった。日本のキリスト教の復興を助けるため、一年間日本に来ていた。滞在の終わり

頃、私はマッカーサーと皇后陛下に会見を申し込むことをすすめてみた。叔母はその両方に成功した。マッカーサーはそれこそ時間オーバーで、叔母一人を前にして、得意のキリスト教や日本統治論をとうとうとのべたのであった。そのもようを詳しく叔母から聞いた。

マッカーサーは、天皇との最初の会見の話を得意にしていた。マッカーサーには、天皇がどういう意図で来るのかわからなかった。マッカーサーのほうでは、天皇は、たぶん自分の身の安全を心配して、いろいろと頼みに来るのではなからうかと想像していたようだ。しかし、その予想はまったくはずれたのである。

雰囲気をはらげるために、マッカーサーがタバコを差し出すと、天皇は一本取って火をつけてもらい、吸うまねをした。そのとき、天皇の手はかすかにふるえていたという。天皇は日本の政府、軍隊、国民がこれまでに行なったすべてに対して自分が責任を負うと言うのであった。内心びっくりしたマッカーサーは、その瞬間から天皇ファンになり、天皇こそ、新しい、民主化されるべき日本の第一人者であると考えようになった。

つづいて天皇は、たったひとつお願いがあったと言った。それは、食べものがなくて困っている日本の国民に、食糧をまわしてほしい、というのであった。それを受けてたったマッカーサーは、アメリカ政府に働きかけ、数カ月かかったが、アメリカの食糧を日本で配給できるようにした。

二八年前の前著に比べると、先述の誤りが訂正され、全体としてより合理的な話となっている。後述『マッカーサー回想記』の信憑性が疑われる材料の一つに、天皇がタバコを口にするはずがない、ということがあげられるが、(河原敏明『天皇裕仁の昭和史』文春文庫、一九八六年二四五ページ)。本文のように、「吸うまねをした」と解すれば説明がつく。しかし「日本の政府、軍隊、国民が行ったすべてに対して自分が責任を負う」と、いう新しい表現の典拠は何か、疑問が残る。

10 ガンサー『マッカーサーの謎』

この第一回の会見で、天皇はこんどの戦争に遺憾の意を表し、自分はこれを防止したいと思つたのだといった。するとマッカーサーは、相手の顔をじつと

見つめながら、もしそれがほんとうだとするならば、なぜその希望を実行に移すことができなかったのか、とたずねた。これにたいする裕仁の答えは、大体次のようなものだつたそうだ。「わたしの国民はわたしが非常に好きである。わたしを好いているからこそ、もしわたしが戦争に反対したり、平和の努力をやったりしたならば、国民はわたしをきつと精神病院かなにかにいれて、戦争が終るまでそこに押しこめておいたにちがいない。また国民がわたしを愛していなかったならば、かれらは簡単にわたしの首をちよん切つたでしょう」。

右は John Gunther, *The Riddle of MacArthur*, Harper & Brothers Publishers, 1951. 木下秀夫・安保長春訳『マッカーサーの謎』（時事通信社、一九五二年、一八三ページ）からの引用である。ガンサーは一九五〇年末来日し、GHQからVIPの特別待遇を与えられ、マ元帥自ら取材に応じた。前出ラウターバック、およびNHK真相箱同様、マッカーサーの極東諮問委員会メンバーへの演説の焼直しで、さらに表現がエスカレートしている。

11 加藤シヅエ「マッカーサーの質問」

それはマッカーサー元帥が駐留軍総司令官の大役を罷免され、帰国後ニューヨークの有名なホテルの一角に住んで居られた時のことです。私と友人二人、元帥にお話をしたいことがあって二十分間の会談の時間をいただきました。二人は元帥の客間に通されました。背広姿で現れたこの方は、いきなり私たち二人に質問をなさいました。

「日本で一番民主主義的な人間はだれだと思うか」。思いもかけぬ問いにさらに追いかけて「それは裕仁天皇である」と言われました。天皇はこの度の戦争の全責任は自分にあると、元帥に直に訴えられました。これは天皇の真実の叶露のお言葉として、私は銘記いたします。

これはもと民社党参議院議員加藤シヅエの『朝日新聞』（一九八九年二月一日付）「テーマ談話室」への投書の一節である。加

藤がマ元帥を訪問したのは、おそらく加藤がMRA（道德再武装）運動の大会出席のため、一九五一年五月から九月にかけて渡米中のことと推測される。そうだとすれば加藤は、マ元帥が天皇との会見について語った最初の日本人ということになるが、彼女はこの話を当時公開した形跡はなく、またその自伝『ある女性政治家の半生』（PHP研究所、一九八一年）の中でも言及していない。

12 重光 葵「天皇陛下讃えるマ元帥」

自分は日本天皇の御伝言を他のなにもよりも喜ぶものである。私は陛下に御出会いして以来戦後の日本の幸福に最も貢献した人は天皇陛下なりと断言するに憚らないのである。それにもかゝらず陛下のなされたことは未だかつて十分に（adequate or fairly）世に知らされて居らぬ。十年前平和再来以来欧州のことが常に書き立てられて陛下の平和貢献の仕事が十分に了解されていないうらみがある。その時代の歴史が正当に書かれる場合には天皇陛下こそ新日本の子の親であるといつて崇められることになると思います。

私は戦前には天皇陛下にはお目にかゝったことはありません。始めて御出会いしたのは東京の米国大使館内であった。どんな態度で、陛下が私に会われるかと好奇心をもって御出会いました。しかるに実に驚きました。（much to my surprise）陛下はまず戦争責任の問題を自ら持ち出されつぎのようにおっしゃいました。これには実にびっくりさせられました。（to my utter astonishment）すなわち、私は日本の戦争遂行に伴ういかなることにまた事件にも全責任をとります。また私は日本の名においてなされたすべての軍事指揮官、軍人および政治家の行為に対しても直接に責任を負います。自分自身の運命について貴下の判断が如何様のものであろうとも、それは自分には問題でない。構わずに総ての事を進めていただきたい（go ahead）私は全責任を負います。これが陛下のお言葉でした。私はこれを聞いて興奮の余り陛下にキスしようとした位です。もし国の罪をあがうことが出来れば進んで統首台に上ることを申出るといふこの日本の元首に対する占領軍の司令官としての私の尊敬の念はその後ますます高まるばかりでした。

陛下は御自身に対していまだかつて思恵（favour）を私に要請した事はありませんでした。とともに決してその尊厳を傷つけた行為に出たこともありません。

を失った。(never lost his great sense of dignity) どうか日本にお帰りの上は自分の温かい御あいさつと親しみの情 (warm personal greeting and friendship) を陛下にお伝え下さい。その際自分の心からなる尊敬の念をも同時にささげて下さい。(an expression of my personal esteem)

一九五五年の八月から九月にかけ、鳩山内閣の外相重光葵は、アメリカ国務省と日米安保条約改訂問題その他を協議するためアメリカに赴いた。出発に先立ち内奏のため郡須を訪れた重光に対し、天皇は「日米協力反共の必要、駐屯軍の撤退は不可なり」と意見をのべるとともに、「自分の知人に何れも懇篤な伝言を命」じた(伊藤隆・渡邊行男編『続重光葵手記』、中央公論社、一九八八年、七三三頁)。この命にしたがい、重光はワシントンでの要務を終えたあと、九月二日の午前、国連大使加瀬俊一とともにニューヨークのホテル、ワードルフ・アストリアに住むマッカーサーを訪れ、その側近ホイットニーを交え、約一時間懇談した。

重光はマッカーサーに「陛下は、もしマッカーサー元帥に会合の機もあらば、自分は米国人の友情を忘れた事はない。米国との友好関係は終始重んずるところである。特に元帥の友情を常に感謝してその健康を祈っている」と伝えてもらいたいとのことであった」と話したことに対し、マッカーサーは「興奮した態度」で以上のように語ったのである。重光はその記憶を、「当時同席したロイ・ハワード氏(スクリップ・ハワード通信社主)が速記していた記録に照らし合わせて」記述した文章を、帰国早々『読売新聞』に寄稿し、同紙は九月十四日に「天皇陛下賛えるマ元帥」と題して発表した。

この記録はマッカーサーが、天皇との会談について公然と日本政府の代表に語った唯一の例として注目に値する。重光の方でもこれを意識して、外人記者の速記録と照合するなど、記述の正確を期したのであろう。マッカーサーは次に言及する回想記同様に、日米協調に熱意を示す天皇に呼応して、天皇の弁明的態度にはまったく言及することなく、男らしく責任を取ろうとした天皇像を創出してみせ、天皇への土産としたのである。

13 『マッカーサー回想記』

私は占領当初から、天皇の扱いを粗末にしてはならないと命令し、君主にふさわしい、あらゆる礼遇をささげることが求めていた。私は丁重に出迎え、日露戦争終始の際、私は一度天皇の父君に拜謁したことがあるという思い出話をしてさしあげた。

天皇は落着きがなく、それまでの幾月かの緊張を、はつきりおもてに現わしていた。天皇の通訳官以外は、全部退席させたあと、私たちは長い迎賓室の端にある暖炉の前にすわった。

私が米国製のタバコを差出すと、天皇は礼をいって受取られた。そのタバコに火をつけてさしあげた時、私は天皇の手がふるえているのに気がついた。私はできるだけ天皇のご気分を楽にすることにとめたが、天皇の感じている屈辱の苦しみが、いかに深いものであるかが、私にはよくわかっていった。

私は天皇が、戦争犯罪者として起訴されないよう、自分の立場を訴えはじめるのではないか、という不安を感じた。連合国の一部、ことにソ連と英国からは、天皇を戦争犯罪者に含めろという声がかなり強くあがっていた。現に、これらの国が提出した最初の戦犯リストには、天皇が筆頭に記されていたのだ。私は、そのような不公正な行動が、いかに悲劇的な結果を招くことになるかが、よくわかっていたので、そういった動きには強力に抵抗した。

ワシントンが英国の見解に傾きそうになった時には、私は、もしそんなことをすれば、少なくとも百万の将兵が必要になると警告した。天皇が戦争犯罪者として起訴され、おそらく絞首刑に処せられることにでもなれば、日本中に軍政をしかねばなくなり、ゲリラ戦がはじまることは、まず間違いないと私はみていた。けっきょく天皇の名は、リストからはずされたのだが、こういったいきさつを、天皇は少しも知っていなかったのである。

しかし、この私の不安は根拠のないものだった。天皇の口から出たのは、次のような言葉だった。

「私は、国民が戦争遂行にあたって政治、軍事両面で行なったすべての決定と行動に対する全責任を負う者として、私自身をあなたの代表する諸国の裁決にゆだねるためおたずねした」

私は大きい感動にゆずられた。死をとまなうほどの責任、それも私の知り尽している諸事実に照らして、明らかに天皇に帰すべきではない責任を引受けようとする、この勇氣に満ちた態度は、私の骨のズイまでもゆり動かした。私はその瞬間、私の前にいる天皇が、個人の資格においても日本の最上の紳士で

あることを感じたのである。

Douglas MacArthur, *Reminiscences*, McGraw-Hill (New York) 1964. として公表され、一九六四年『朝日新聞』（二月六日〔六月三日〕）に抄訳連載された上、同年『マッカーサー回想記』（津島一夫訳、朝日新聞社）として出版されたものの一節（二四九ページ）である。本稿の「はじめに」でのべたように、本書に事実の誤りが多いことはすでに指摘されているが、この引用箇所だけでも、天皇を丁重に出迎えたとか、明治天皇に拜謁したことがあると話したとか、この会見以前にすでに各国の天皇を筆頭とする戦犯リストが提出されていたとか、同じく会見以前にワシントンに対し天皇を戦犯とすれば百万の将兵が必要になると警告したとか、その結果天皇の名がリストから外されたとか、ことごとく誤りである。したがって肝心の天皇発言にしても、これを正確なものとみとめることはできない。これは前記重光葵に対する談話同様、アチソン覚書に記された天皇発言の後半を誇張して表現したものである。マ元帥が天皇に好印象をもったのは事実である。この印象が長年月の間に、天皇発言の弁明部分を忘れさせ、責任承認部分を増幅させたのではあるまいか。もし弁明部分を記憶していたとしても、一九六〇年安保闘争後日米関係が安定に向かっているとき、天皇の体面を傷つける必要はまったくないのである。

六 会談内容の実体

マ元帥のもらした会談内容をつたえる一三点の資料を通観して、まず気づくのはそのことごとくが天皇の戦争責任問題に限定されていることである。このことはこの問題が会談におけるマ元帥の主要関心事であったとともに、この問題についての「天皇発言」をもらすことに大きな政治的意味があったことを物語る。すなわち彼の天皇制対策の武器として、「天皇発

言」を最大限に利用することにつとめたのである。

「天皇発言」は、マ元帥の連合国最高司令官在任中と、それ以後とで大きく内容が異なる。帰国後はもっぱら、責任を一身に負うと明言した天皇のいさぎよさが語られる。これに対し在任中に、いさぎよさとともにさまざまに弁明する天皇の発言が示される。在任中のマ元帥談は一九五〇年の対ガンサーを除き、ことごとく東京裁判判決（一九四八年二月）前に集中している。このことはマ元帥が日本占領に必要な天皇の存在を維持するため「天皇発言」をもらしたことを示している。豊下論文の次の言葉は事態の真相を言い当てたものといえよう。

マッカーサーは東京裁判の開廷に前後して、全く相反する「天皇発言」を文字通り「裁判対策」として実に巧みに駆使した、ということであろう。要するに、極東諮問委員会の代表団やライフ誌、NHKなど、「表舞台」においては、自分は戦争に反対であったが軍閥や国民の意思に抗することはできなかったとの「天皇発言」が活用され、だからこそ天皇に戦争責任はなく免訴されるのが至当である、とのアピールが展開された。他方「裏舞台」においては、戦争が自らの命令によって行われた以上は全責任を負うとの「天皇発言」がキーナンや田中隆吉に「内々」に伝えられることによって、天皇を絶対に出廷させてはならないという両者の決意と覚悟が固められ、「法廷闘争」において見事な成果がもたらされたのである。当時マッカーサーの周辺から流出した「天皇発言」は、このようにすぐれて政治的性格をおびていたのである。

帰国後のマ元帥による「天皇発言」はアメリカに依存する親米支配層の象徴としての天皇の徳をたたえることにより、日米関係をより強固なものとするという意図のもとにもたらされたと解しうる。

「天皇発言」の表現は実に多様である。弁解の辞としては、「宣戦の詔書を東条が使ったようには使わせるつもりはなかった」（フェラーズ）、「東条が私をだました」（アチソン）、誰が天皇であっても開戦に反対することはできなかっただろう（ベレンセン・ラウターバック・NHK真相箱）、反対したら退位させられただろう（ラウターバック・真相箱）、押しこめられるか殺されたかだろ

う（ガンサー）。責任をとる言葉としては、「国民の指導者として責任がある」（アチソン）、「全責任は自分にある」（パワーズ・キナン・加藤・重光）、「自分だけを処罰せよ」（キナン）、「自分の命を奪え」（パワーズ）、「絞首刑でもかまわぬ」（バイニング）、「裁決をマッカーサーに委ねる」（マッカーサー回想記）等々。

要するにマ元帥のつたえる「天皇発言」は実際に天皇がのべた言葉を正確につたえるものではないのである。

一方日本側の資料はというと、内務省スポークスマン・ワイルズ・藤田のいずれも第一次資料とはいえない。木戸も天皇の戦争責任についての発言に言及せず、「御会見録」は「コノ戦争ニツイテハ、自分トシテハ極力之ヲ避ケ度イ考デアリマシタガ、戦争トナルノ結果ヲ見マシタコトハ、自分ノ最モ遺憾トスル所デアリマス」とのみ記す。

いずれにしても天皇の実際の発言を正確に再現することは不可能というほかはない。奥村が会談の正確な再現につとめたことに疑いはないが、表現において若干の主観的判断が入り込む余地はありうる。また通訳に際し、実際の発言に強弱の色彩を加味することもありうる。「御会見録」が公表されれば、すべてが氷解するように期待する人が多いが、その期待は裏切られるであろう。くりかえしになるが、「御会見録」はあくまで要領筆記であり、速記録ではないからである。

しかし、天皇の実際の発言内容の推定は不可能ではない。マ元帥のつたえる「天皇発言」の諸要素を、源流にさかのぼって検討してみよう。「天皇発言」の内容は、戦争責任に対する弁解と承認と二つにわかれる。前者はさらに、真珠湾攻撃は東条の責任だという弁解と、開戦回避に努力したが力及ばずという弁明とに区分できる。

東条に責任を帰する「発言」の源は一九四五年一〇月二日付のフェラーズ覚書と、一〇月二七日付アチソン覚書にある。

私は天皇が名指しで東条に責を帰したとは思わない。内務省スポークスマンが九月二九日付三紙の発禁理由を説明した際にいったように、公的な場所で「天皇は決して個人を名指しで非難することはない」からである。⁽²¹⁾しかし結果としては、クラックホーンとの問答のように、マ元帥に同じようなカマをかけられて、東条非難と受けとられても仕方のない表現をとっ

たことは考えられる。豊下論文が指摘するように天皇自身にも、東条非難もやむなしという気持が動いていたことは、一九四六年一月二九日付の天皇のイギリス国王への親書²²によってもうかがわれるからである。

次に開戦回避への努力の点であるが、「御会見録」に近い表現の発言があったことは事実であろう。ベレンソン報告にみえる「天皇発言」はあまりに理詰めで、作為の疑いが濃い。天皇はあまりくどくどとは弁明しなかったことは、次の二点から証明できる。一つは時間の点である。「御会見録」によれば、会見時間約三七分のうち約二〇分はマ元帥の冒頭の演説にとられている。のこり一七分の間にくわしい弁明はできるはずはなかった。他は会見の二日後、天皇は木戸に対し、アメリカの天皇追及の世論に「頗被りで行くと云ふも一つの行方なるが、又更に自分の真意を新聞記者を通して明にするか或はマ元帥に話すと云ふことも考えらるゝが如何」と相談している事実である（『木戸幸一日記』九月二九日の条）。充分弁解したならば、マ元帥に更に話す必要はない。木戸は「弁明すればするほど当方の希望に反し邪道に入るの虞れあり」と反対している。

次に戦争責任の承認問題に移ろう。「御会見録」は「戦争トナルノ結果ヲ見マシタルコトハ自分ノ最モ遺憾トスル所デアリマス」と表現しているが、アチソン覚書にあるように「私は日本国民の指導者であり、国民の行動に責任がある」といった意味の発言、あるいは奥村のそのように受けとれる通訳は実際にあったのではなからうか。形式的にせよ戦争責任を認める言葉があつてこそ、「御会見録」にある「陛下ガ平和ノ方向ニ持ツテ行クタメ御軫念アラセラレタ御胸中ハ、自分ノ十分諒察申上グル所デアリマス」云々のマ元帥の慰め言葉も出てくるというものである。ベレンソン報告に出てくる「みずからの行動について進んで全責任を負う覚悟をもち」というマ元帥の評価も、またマ元帥が以後しばしばくりかえす天皇讃美も、何らかの天皇の戦争責任自認の発言を前提としよう。²³

戦争責任を認めることはたしかに死につながりかねない。だからといって、天皇が自ら「戦犯者をみな釈放して、私だけ処罰してもらいたい」（キーン）、「私をどのようにしようともかまわない」、「絞首刑にされてもかまわない」（バイニング）な

どといったとは考えられない。天皇が戦犯を救いたいと思っていたことは事実だが、その手段は退位であり、それもかえって逆効果になりかねぬとの木戸の意見もあって思いとどまった経過がある（木戸日記、八月二十九日の条）。マ元帥は天皇の「道徳的勇氣」（ブレイクスリー）に感銘を受けたあまりに、「天皇発言」をさまざまな表現にエスカレートさせたものとみられる。

天皇が自ら戦争責任を認めたことを疑問とする意見もある。児島襄『天皇の戦争責任』（七四ページ）は二つの疑問を呈する。第一は、政府の決定に裁可を下さぬわけには行かぬという「憲法の立場を自覚する」天皇がはたして「戦争犯罪人にあてはめられる」「戦争責任」を認める発言をするだろうか」という疑問である。これに対しては、袖井林二郎『マッカーサーの二千字』（九三ページ）にしたがって、天皇が「責任を認めることによってむしろ罪は許されるに違いない、という期待感」をもって、いわば相手の内懷に飛込む気持ちで責任を認めた、との答えが可能であろう。

第二は、前記木戸日記九月二十九日の条によれば、天皇は自分の「真意」をマ元帥に更に説明したいといっているが、「もしわづか二日前に天皇がマッカーサー元帥に「戦争責任」がある旨の発言をしているのであれば、なぜあらためて「マ元帥」に意向を述べる必要があるのか」との疑問である。児島氏は天皇は戦争責任のみを認めたとすれば、の前提に立っているが、実は天皇は責任逃れの弁解も行っているものであり、こちらの方が天皇の「真意」にほかならない。

私は戦争責任問題についての天皇発言は、おおよそ次のようなものではなかったかと推測する。「開戦についていえば、宣戦布告に先立って真珠湾攻撃を行うつもりはなかった。私は戦争回避のため極力努力したが、結局は開戦のやむなきにいたったことは、まことに遺憾である。その責任は日本の君主たる自分にある」。

以上の考察をふまえて、「御会見録」にしたがい、会談の概要を示そう。

(1) 写真撮影のあと、二、三あいさつの言葉を交したあと、

(2)マ元帥は口調を変え、奥村に向い、天皇に伝えよ (tell the Emperor) と前置をし、約二十分にわたり、すなわち会見時間約三十七分の半分以上を費して所見をのべた。この間、天皇が口をはさむことをゆるさない。まず彼は兵器の進歩により、もし戦争が起れば、人類絶滅にも至るであろうとして、平和政策の必要性を強調する。これは彼の將軍としての実感を卒直に吐露したものであろう。新憲法第九条への重要な伏線である。次に彼は日本が抗戦を続ければ人民に大被害が出たであろうとして、天皇の英断をほめる。最後に彼は、世界の世論が新聞を先頭に天皇の戦争責任を追及しており、対策に苦慮していることを告げ、この戦争責任について天皇はどう考えているのかと水を向ける。

(3)天皇はいう。宣戦布告に先立って真珠湾攻撃を行うつもりはなかった。戦争回避に極力努力したが、結局は開戦のやむなきにいたったことはまことに遺憾である。その責任は日本の君主たる自分にある、と。この卒直な態度にマ元帥は感動し、天皇の平和志向はよくわかる。戦争への大勢を一人で支えることは難しいと同情を示す。しかし戦争責任についての判断は後世にゆだねるより他はない、と責任問題については保留の態度を示す。

(4)天皇はポツダム宣言を履行し、平和日本を建設のための努力を改めて誓う。なおポツダム宣言を忠実に履行するとの意思表示は、前記のようにすでに九月二〇日、藤田侍従長を通してすでに行われていた。

(5)終戦後日本政府、軍隊および国民がGHQの命令に従順であるのは、天皇の威光のしからしむるところと、マ元帥は天皇をほめ、このように国民が天皇を支持していることは「今後ノ事態ニ処スルニ当リ、陛下ノ御氣持ヲ強ク力付ケテ然ルベキコト」と、連合国の天皇制批判が強くとも、国民の支持さえあれば天皇制の維持は可能であろうと暗に天皇をほげます。そして、「陛下程日本ヲ知り日本国民ヲ知ル者ハ他ニ御座居マセヌ」と天皇の国民統率者としての地位を認め、今後とも占領政策に対する意見や助言を聞かせてほしいとのべる。

(6)マ元帥の好意的態度に氣をよくした天皇は、マッカーサーの使命は東亜の復興を通しての世界平和への寄与であるとし

て、その達成を祈るとのべるが、マ元帥は、自分は「権威」に使われる「出先」にすぎぬと謙遜しつつ、暗に、天皇制問題は自分の一存にはならぬと釘をさす。このマ発言は、九月一九日に、國務次官ディーン・アチソンが対日「政策を遂行するに当り占領軍は政策の道具であり、政策の決定者ではない」と、マ元帥を牽制する発言を記者会見で行ったことをふまえている（前出森田論文）。

(7) 天皇は占領が平穩裡に行われたことに満足の意を表し、マ元帥は占領軍の暴行を最少限にとどめるべく努力することを約す。

(8) 少し雑談したあと天皇は別れを告げ、マ元帥は再び天皇の意見や助言があれば何時でも遠慮なく聞かせてほしいと繰返し、天皇を玄関まで送り出す。

この会見は双方にとって満足すべきものであった。マ元帥は天皇が敗者の総帥としての礼をとり、形式的にせよ率直に戦争責任を認め、かつ改めてポツダム宣言の忠実な履行を約したこと、および占領軍の平穩な進駐に感謝していることに満足した。マ元帥は無条件降伏と間接占領が円滑に実施されている現状により、天皇の存在意義をこのときまでに確認していたと推測されるが、この会見によりますます何らかの形の実皇制維持の必要を感じた。²⁴

他方、天皇の満足度はさらに高かった。マッカーサーは天皇の戦争責任を深くは追及せず、むしろ天皇の弁明を聞入れたこと、さらに天皇をいぜん日本の元首と認め、日本政治についての意見や助言を求めたことは、連合国側のきびしい天皇追及の世論におののいていた天皇とその側近をひとまず安心させるに足るものであった。内大臣木戸幸一は、一九六七年、国立国会図書館のヒアリングに際し、この会見について「大変いい効果があった。もしお会いしなければ、戦犯問題もあり、我々が防ごうにも防ぎきれなかったと思う」と語っている（『朝日新聞』一九八九年二月二〇日）。マ元帥は天皇を通して日本占領を円滑に遂行したいと願い、天皇はマ元帥により、戦争責任追及から免れ、天皇の地位を保全したいと願った。両者の願望実

現のための相互協力がこの会見で約束確認されたこと、ここに象徴天皇制の出発点が求められる。

注

- (1) 一九七七年八月三日の記者会見における天皇発言（高橋紘『陛下、お尋ね申し上げます』文春文庫、一九八八年、二五七ページ）。天皇は一九七六年一月六日にも同趣旨のことをのべている（同上、二四九ページ）
- (2) 『マッカーサー回想記』の「訳者あとがき」および、「マッカーサー戦記・虚構と真実」（『文藝春秋』一九六四年六月号）をみられたい。
- (3) 児島襄『東京裁判』(上)（中公文庫、五〇ページ）によれば、マ元帥は九月一八日に行われた東久邇首相の記者会見の「数日後」、天皇自ら降伏の意思表示に来るべきことをほめかし、これをうけてダイク准将が副官に「宮廷に電話して、元帥が天皇に会いたがっていると伝へる。直ぐに、だ」と指示したという。これに応えて九月二〇日に吉田外相と藤田侍従長がマ元帥を訪問したとすれば話はうまくつながるが、袖井林二郎『マッカーサーの二千年』（中央公論社、一九七四年、八九ページ）がいうように「あり得ない話」のように受けとれる。しかし間接的なほめかしがあった可能性は否定できない。
- (4) 専属通訳F・パウズの「天皇・マッカーサー会見の真実」（『文藝春秋』一九八九年三月特別号「大いなる昭和」）は、元帥の副官フェラーズ准将のいとこにあたる外務省休職中の寺崎英成の夫人から、天皇の意中がGHQに伝えられたと記す。当のフェラーズは「天皇が元帥に会いたがっている」と報じたのは、外務省儀典局長で宮内省御用掛を兼ねる萩原徹だという（週刊新潮編集部『マッカーサーの日本』新潮社、一九七〇年、五四ページ）。その萩原は大森実『戦後秘史』5（講談社、一九七五年、一〇六ページ）において「九月十八、九日ごろ」吉田外相から「マッカーサー元帥との間で、天皇との訪問を取り決めたから」GHQに行つて日程と細目のアレンジをするように命ぜられ、フェラーズと会ったと語る。あるいは萩原は十八、九日ごろひそかに天皇の意をGHQにつたえ、二〇日以後にGHQと細目を取りきめたのかも知れない。
- (5) 岸田氏の教示によれば、岸田氏は侍従徳川義寛氏の歌「ボツダム宣言実行すとのみここに実証ありと元帥はのべぬ（九月二十日）」（歌集『終戦このかた』）を見て、徳川氏の聴取りを行ったという。
- (6) 問題の写真と記事は九月二八日付に掲載されるはずであったが、前日午後一時、情報局が「本日、天皇陛下、マッカーサー元帥をご訪問あらせられた記事取扱いに關しては宮内省発表および記事資料ならびにマッカーサー司令部発表以外に取扱わざるようご注意相成りたし」との通達を発した（高桑幸吉『マッカーサーの新聞検閲』読売新聞社、一九八四年、四五ページ）ため中止された。これを知ったGHQは外務省に抗議し、二九日の各紙は写真と記事のをのせた。ところがこのやりとりを知らぬ情報局が発禁処分とした。そこで新聞社側がGHQに訴えたところ、GHQはただちに発禁処分の取消しを命じたという（熊倉正弥『言論統制下の記者』朝日新聞社、一九八九年、一五〇ページ）。『ニューヨーク・タイムズ』（九月二九日）によれば情報局のウラベ（ト部敏男）は次のように発禁の理由を説明している。「情報局の多数意見はベリー会見記には異存がなかった。しかし大半はクラックホーン会見記の配布を差止めることに一致した。その理由は、同記事が天皇自身が宣戦の詔書を東条大将が誤用したと訴えていることを明らかにしたからである」。「ベリー会見記の掲載のみを許可するのは、クラックホーン氏に不公平だと考えられた。」（三紙（朝日、毎日、読売）は内務省の禁止を無視した）。「情報局の異議は、とくにクラックホーン会見記の次の部分に向けられた。すなわち『朝日』では「宣戦の大詔は東条の如くにこれを使用する意図はなかつ

（一九八九・一〇・一四稿、一九九〇・一・二三改稿）

た」と表現されている部分である。「クラックホーンの質問と天皇の回答の正文は次のとおりである。(本文で後述―松尾)「天皇は決して個人を名指しで非難することはない。その必要があれば、それは首相その他の官吏の仕事である。天皇はそのような非難をするような方ではない。日本の民衆は天皇自身が東条を非難したと思うかも知れない。そうなれば安寧秩序が乱れるものとなる。」これまで九月二十九日の新聞発禁はもっぱら天皇マ元帥会見写真のせいとされてきたが、外人記者との会見記事も禁止理由の一つであったのである。

- (7) 亀井淳「外国人の目に映った『敗戦天皇』」(『赤旗』評論版、一九八九年二月六日付)は「私の印象ではこの九月二十五日の記者会見と、翌々日のマッカーサー会見とは当然ワンセットで、同じような『書面会談』のシナリオがあらかじめできていたのではないかと記す。『ワンセット』説には同感だが、二七日の会見のシナリオまでが出来ていたとは実際の会見の内容からみて考えられない。亀井氏は『マッカーサー回想記』以外「客観的資料は公表されていない」というが、これは事実と反する。

- (8) 奥村は当時外務省参事官。内閣情報局から政務局に転動してきたばかりで、仕事がなかった。外相吉田茂の意向で九月二五・二七両日の会見で天皇の通訳をつとめることになり、これを曾禰益が奥村に伝えた(奥村「通訳」『国際時評』一九七三年六月号)。

- (9) 寛は、東大で美濃部達吉と対峙した天皇主権説の憲法学者寛克彦の息。当時宮内省総務局で庶務・幸啓・宣旨の三課長を兼ね、当日の行幸主務官をつとめた。

- (10) 実際に先駆の事に乗ったのは皇宮警察部警衛課長の川越憲雄と禁衛府衛士監橋本賢次(近衛歩兵第一連隊第二大隊長、少佐)であった。彼らの当日の行動については、加瀬英明『天皇家の戦い』(新潮社、一九七五年)一四七―一五二ページをみよ。

- (11) 加瀬英明『天皇家の戦い』(新潮社、一九七五年、一四九ページ)によれば、一台目の天皇車の運転手席の隣には「警護の内舎人である柴伝吉が乗った」という。

- (12) 加瀬『天皇家の戦い』(二五一ページ)は、車列が門のところで小銃を持った衛兵に阻止された、と記すが、寛は行幸主務官として、その事実無しと断言する(寛『今上陛下と母宮貞明皇后』一〇六ページ)。

- (13) フォービアン・パワーズ「天皇・マッカーサー会見の真実」(『文藝春秋』一九八九年三月臨時増刊号「大いなる昭和」)は「マ元帥は陛下の震える手を両手でとって握手し、陛下はそうしながらも低く低くお辞儀をなさるので、結局、陛下の頭の上で握手するような形になってしまいました」とつたえる。

- (14) 奥村はこれより先、一九五七年発行の吉田茂『回想十年』第一巻(新潮社)に「陛下とマ元帥」の一文を寄せている。一般にはこの方がよく知られているが、くわしさにおいては本文が勝っている。

- (15) 船山喜久彌「天皇とマッカーサー」45分間の真実」(『現代』一九八八年一〇月号)によれば、暖炉に火を入れたのは、微気と湿気をとるためで、マッカーサー夫人の指図という。なお、客間にはグルー大使の愛蔵品の陶磁器がマッカーサー夫人の手で飾られたという。なお、このグルーの愛蔵品の始末については中村政則『象徴天皇制への道』(岩波新書、一九八九年、一五六ページ)をみよ。

- (16) 奥村のこの文章は寛本のほか大森実『戦後秘史』5にも転載されている。なお奥村は一九四七年五月六日の第三回天皇・マ元帥会見にも通訳にあたったが、その内容がもれて、アメリカのNBC放送で報じられたことでマ元帥の激怒を買ひ、外務省を免職となった(一九五二年外務次官に復活)。この事件は、実は奥村の責任でなく、白洲次郎(終戦連絡事務局参与、吉田茂の側近)のせいであることが、「入江侍従長日記」で明確となった(『朝日新聞』一九八九年二月一八日付)。一九七五年九月一〇日、天皇は奥村の死の直前に「奥村には全然罪はない。白洲がすべて悪い。だから吉田が白洲をアメリカ大

使にすすめたが、アメリカはアグレマンをくれなかった」と入江に語った。奥村の口が堅かったことが立証されたかたちである。奥村は生前第一回会見の内容についてはまったく部外者には語っていない。ただ職務上侍従長の藤田尚徳と終連事務局政治部長の曾根益とには口頭で報告した。曾根『私のメモアール』（日刊工業新聞社、一九七五年、二二五ページ）は次のように書く。「ただ一人通訳で行ったのが奥村勝蔵君で、この人の口は固いが、無論僕がその方の最高責任者でもあったので内容は概ね語ってくれたけれども、ひとことにしていえば非常に友好的な会見であった。恐らく向こうはあわれみを乞いにやってくるんだらうと思っていたようだが、天皇が実に立派な態度で、自分のことなどひとこともいわずに日本の国民を頼みますといった、私心のない立派な態度で、マッカーサーも非常に感銘したらしく、最後には自ら玄関にまで送ってきた。」この記述が後記の重光稿や『マッカーサー回想記』などに影響された疑いはのこる。

(17) 保阪正康『敗戦前後・四〇年目の検証』（朝日新聞社、一九八五年、一六九ページ）は宮内省から吹上御苑に入るまでの自動車の中で、侍従岡部長章が天皇に話しかけたところ「ええ」とのみ「いかにも精細き根細るかのよう」に答えたこと、岡部の手記によってつたえる。岡部長章『ある侍従の回想記』（朝日ソノラマ、一九九〇年、一九八ページ）にも同趣旨の記述がある。寛素彦本（九〇ページ）は、天皇の車はアメリカ大使館から直接吹上御文庫に帰着したと断言し、岡部の同乗を否定する。

(18) 会見の内容を伝える他の資料としては前記曾根益『私のメモアール』と船山喜久弥「天皇とマッカーサー」45分間の真実（『現代』一九八八年一〇月号）がある。船山氏は、当時アメリカ大使館に執事として勤務し、会見場所の設営を行い、会談中に薪を暖炉にくべた船山貞吉の息である。この文章は父の見聞をまとめたもののようであり、会見の雰囲気はよくつたえているが、会談の内容については、どこまでが本人の記憶によるものか明確でない。大半が「奥村謹記」や「マッカーサー回想記」に依據している。このほか猪瀬直樹「昭和天皇・マッカーサー会見」を検証する（別冊『週刊ポスト』一九八九年二月五日号）の中の、筆者とマッカーサーの主治医だったロジャー・エグバークとの会話がある。エグバークはマッカーサー夫人とともにカーテンのかけから会見の模様をのぞき見していた。

(問)「会見の中身では、どのようなところを憶えていますか。」

①「簡単なやりとりの後、将軍はこれ以上交戦をつづけていたなら日本全土は灰燼かいじんに帰したであろう、と滔々とうとうと述べてから、各地の残存している軍人たちの復員が秩序正しく行なわれるような政府が望ましいと強調しました」

(問)「昭和天皇は、どんな様子でしたか。」

②「いまでも鮮明に憶えているのは、日本はこれから新しい時代を迎えるのでよろしくお願いしたい、という天皇の言葉です。将軍は天皇が英語を解するが、すでに自分の理解したことを通訳が繰り返すのを待つ間に返答を考える時間を少し稼いでいるかと思っていたようでした」

(問)「戦争トナルノ結果ヲ見マシタコトハ、自分ノ最モ遺憾トスル所デアリマス」というあたり？」

③「はっきり憶えていないが、そうかもしれない。会談の後で、フェラーズ准将の覚書（筆者注——会談の五日後、10月2日付）を読んでからだと思うが、将軍は車のなかで、ポツリとわたしに言ったんです。『天皇が、自らの神性を否定したらどんな事態になるか、気になるところだな』と」

(問)「それは、いわゆる『人間宣言』（昭和21年元旦に発表された）についてですね。昭和天皇・マッカーサー会見の直後に、そう言ったというのは興味深い。なぜなら、マッカーサーは、占領統治にとって『天皇』が不可欠であるという認識を、あの会見から得たということになるからです。」

④「そうですね、会見の骨子も、天皇は国民にとって侵食しうべからざる神であった、従って、国民は天皇に忠実であるはずだから、あなたの力に

よって国民を善導していただく。それによって占領統治がうまくいくだろう、ということでした」

エグバークの回想には②のように天皇が通訳の間に時間稼ぎをしたというような興味深い点もあるが、全体として記憶が薄れており、天皇発言についてはとくにあいまいである。マ元帥の発言も①、④のように、「御会見録」の⑤の部分をやがめて記憶している。なお寛素彦『今上陛下と母宮貞明皇后』(二〇五ページ)によれば、本書を発行した一九八七年四月以前に、エグバークはある週刊誌で会見の様態を語っているとのことであるが、入手しえなかった。

(19) 坂本孝治郎『象徴天皇へのパフォーマンス』(七二ページ)は、「御会見録」は一九七五年九月から十月にかけての天皇訪米に「照準」をあわせて、「外務省サイドから意識的にリークされた」と想定される」としているが、なぜ外務省がリークせねばならぬか、その必要性の説明がない。「御会見録」はすでにのべたように天皇の「戦後美談」に疑問を投げかけるものであり、そういう性質の文書を外務省筋がはたして故意にもらすであろうか。

(20) 一〇月一三日付のアチソン覚書によれば、木戸内大臣の使として松平康昌秘書官長がアチソンに対し、天皇のマ元帥訪問に対する答礼を要請したという。アチソンは、天皇は「ある程度メンツを失うことは望ましい」とマ元帥に具申し、結局、マ元帥は日本を離れるまで一度も答礼訪問を行わなかった(『朝日新聞』一九八六年二月八日付)。

(21) 「アチソン覚書」が一九八六年二月八日付の『朝日新聞』で紹介されたとき、加瀬俊一は「マ元帥との会談で、陛下が他に責任転嫁する発言をするとは、人柄からいって思えない。陛下の『すべて責任は自分に』という言葉が、元帥を感動させたのであって、マ元帥に何回も内容を聞いたが、そういう事は言っていなかった」とアチソン覚書に疑問を呈している。これからみてもマ元帥が日本人には徹底的に天皇を美化してみせたことがわかる。

(22) 「私は、戦争を回避すべく最善を尽しました。しかしながら国内の諸事情により、まことに不本意ながら貴国に対し戦端を開く事態に立ち至りました。(中略)私は、当時の首相東条大将に対し、英国での楽しい日々を想い起しつつ、強い遺憾と不本意の気持をもって余儀なく〔署名〕するのだと繰り返し述べながら、断腸の思いで宣戦の詔書に署名したのであります」(豊下櫛彦訳)。親書の全文は高橋紘「天皇の英国王室宛て『親書』」(『みず』一九八八年三月号)をみよ。なお中村政則「日本占領と天皇制」(『歴史学研究』一九八九年一月号)および豊下論文を参照されたい。

(23) ここで天皇の戦争責任そのものについて論ずるつもりはないが、天皇がこのようにマッカーサーに対しては自らの戦争責任を認めたにもかかわらず、日本国民に対しては終生これを認めようとしなかったことだけは記しておかねばならない。

(24) 豊下論文は、「当時のマッカーサーの地位は、日本国内における『全能の権力者』イメージとはほど遠く、ワシントンとの関係においても他の連合国との関係においても、『流動的』といってい程にきわめて微妙で不安定なものであった」として、「外からの一切の干渉を排し、国内での『絶対権力』を維持しつつ自らの占領遂行の基盤を固めていく上で、『政治的道具』としての天皇の重要性が改めて強く認識されざるを得なかったのである。とすれば、この会見の歴史的な意義は、天皇によるマッカーサーの「占領権力」への全面協力とマッカーサーによる天皇の「権威」の利用という、両者の波長が見事に一致し、相互確認が交されたところに求められるべきであろう。言いかえるならば、この会見こそ、後に顕在化する「権力」と「権威」との「二重(分担)支配」(坂本孝治郎『象徴天皇制へのパフォーマンス』)への出発点を画するものに他ならなかったのである。」とこの会見を位置づけている。大筋において同意できるが若干の疑問はのこる。一つには、マッカーサーの地位が、当時において「きわめて微妙で不安定なものであった」といえるだろうか。たしかに形式的、あるいは法的における地位は不安定であったといえるかも知れぬが、日本軍を打破った最大の功労者としての実績をふまえたその日本の最高支配者としての実際の地位は安定していたのではなからうか。だからこそ本国からの帰国要請を拒否しとおすことが可能だったのではない

か。第二に、「権力」と「権威」との「二重（分担）支配」という表現で、占領下の支配体制をとらえることができるだろうか。マッカーサーは「権力」だけでなく、「権威」を兼備していたのではないか。その「権威」が天皇の上位にあることを、会見の形式——坂本氏の表現を借りれば「服属儀礼」——が示しているのではないか。マッカーサーが天皇の権威を利用したのは事実だが、それはあくまで自己に従属したもののそれであったのである。